

1、はじめに

超高齢社会におけるウェルエイジングとウェルディングについて日韓で共に語りあうために、一昨年に95歳で亡くなった日本の詩人・ノンフィクション作家の森崎和江（1927～2022）の主に老年期の生と思想を紹介したい¹。

森崎の著書は2冊（『からゆきさん』1976、『慶州は母の呼び声 ―わが原郷』1984）が韓国語に翻訳されているが²、日本に比べ韓国では森崎についてほとんど知られていないと思われるので、まずは83歳のときの写真から紹介しよう。



前列中央の紫の帽子の女性が森崎和江である。場所は韓国の金海国際空港。写真は「ゆたかカレッジ」

¹ 森崎は、日本が「高齢社会」に入った1995年に68歳、「超高齢社会」に入った2010年に83歳であり、その老年期（65歳～）はちょうど「高齢社会」から「超高齢社会」への時期に重なる。

² 모리사키 카즈에 저, 채경희 번역) 『최사슬의 바다』 (박이정, 2002.9)、모리사키 가즈에 저, 박승주·마쓰이 리에 번역 『경주는 어머니가 부르는 소리 식민지 조선에서 성장한 한 일본인의 수기』 (글항아리, 2020.11)。

(知的障害のある青年たちの4年制・福祉型大学) 学長の2010年3月23日のブログから³。

森崎と並んで立つ赤いマフラーの女性は、韓国の巨済島にある知的障害児(者)の孤児園「愛光園」を創立した金任順(1925～)園長⁴。森崎が、父の金泉中学校長への転任(慶州中学校初代校長から)に伴い転入(大邱高等女学校から)した金泉高等女学校時代の級友である。この「愛光園」を2010年3月21～23日に森崎らは訪れたのである。

この写真から約2カ月後の5月17～19日、今度は「愛光園」の園生が修学旅行で金任順園長らとともに来日、森崎の住む地域の人たちと交流している。当時の朝日新聞の記事(「修学旅行、日韓結び10年作家・森崎さんの友情 施設園生ら17日宗像入り」)によって、この交流の歴史を見てみよう。

韓国の知的障害者施設「愛光園」の園生たちが17～19日、修学旅行で来日し、宗像市や鞍手町の施設の人たちと交流する。同市在住の作家、森崎和江さん(83)が16歳までを過ごした韓国を再訪してつないだ友情をもとに、市民交流が広がり今年10周年を迎えた。/[...] 森崎さんは1944年春、旧青木村(現久留米市)出身だった父の縁で福岡県立女子専門学校(現福岡女子大)に入学、日本で終戦を迎えた。85年の訪韓時に金さんと再会した。/金さんは朝鮮戦争の際に巨済島に避難。戦乱を経て、戦災孤児の世話を始めた。愛光園は、孤児院から知的障害のある孤児たち、さらに一般の知的障害児の施設に転じた。/森崎さんと金さんの2人は98年、宗像市で「日本のお母さん、韓国のお母さん」のテーマで対談した。これを機に、愛光園の園生の宗像への修学旅行が2000年に始まり、受け入れのために市民有志でつくる「愛光会」が発足した。/3回目の02年からは隔年で続き今年7回目。[...] 森崎さんは「すぐ近くにある両国の庶民が、次世代、孫の世代まで、親しく交流できるようになってほしい」と話している。⁵

「森崎和江自撰年譜」(以下、「年譜」)によれば、1998年12月14日「宗像市教育委員会主宰の世界人権宣言五十周年記念に、韓国の旧友で同国巨済島の愛光園創立者・金任順と対談。同日、福岡市女性センターアミカスで「韓日草の根交流・いのち響きあう」を金任順と語り合う」とある⁶。

その翌年10月に森崎は、金任順からの聞きとりをもとにした『愛することは待つことよ 一二十一世紀へのメッセージ』を刊行し、印税を愛光園に寄付している。「年譜」に森崎は、「積年の心の重荷をわずかに果たす」と記した。

『愛することは待つことよ』巻頭には、次のような詩が掲げられている。

³ <http://blog.livedoor.jp/kyf2/archives/51367731.html>

⁴ 金任順園長に関しては、ぜひ次の動画を視聴してほしい。「거제도 애광원 사람들이 가진 나눔의 밥상! [한국인의 밥상 KBS 20231026 방송]」(https://www.youtube.com/watch?v=o_zuyg1Z8ag)。

⁵ 『朝日新聞(福岡)』2010.5.14朝刊。

⁶ 『森崎和江コレクション—精神史の旅 5 回帰』360頁(藤原書店、2009.3)。また、「年譜」同年末尾に「宗像市民有志により、愛光園との交流支援の会・愛行会が誕生。以来例年五月に、園生修学旅行を市内に迎える」と注記がある。愛行会については、森崎和江『語りべの海』172頁(岩波書店、2006.1)にも記載がある。

玄界灘に落ちる夕陽を/あなたと浴びる/世界人権宣言五十周年記念の対談を/宗像市であなたと
終えて//ありがとう^{キムイムスン}金任順さん/韓国の孤児千人のおかあさん/あなたと/敗戦前の数か月^{キムチョン}金泉で机
を並べ//植民二世のわたしは/東^{トシ}海の波しぶく列島で生き直して/あなたの故郷に詫びたいと/母国を
探し地下坑をゆきました//風の便りのあなた/同時代を生きたあなた/民族を問い性を問いいのちを
問いつつ/互いにアジアを踏みわたり//今宵宗像海人族の渚に立つ/入り日の果てはユーラシア大陸/
砂あらしが夜空を染める/あなたとわたしを吹きわたる//闇夜にひびく脱植民地後の血しぶき/地球
の渇き/あなたと聞くいのちの母国を探す音/グローバルなその孤児の群れのあしおと⁷

森崎に関する研究は、これまで主に中壮年期の活動（筑豊炭田を拠点にした文化運動誌『サークル村』
や女性交流誌『無名通信』の発刊など）を中心に、戦後思想あるいはフェミニズムやポストコロニアリス
ムといった問題関心から論じられてきた。

もちろん、後期の森崎思想の重要テーマが「いのち（の再生）」であることも指摘されているが⁸、それ
を彼女の「積年の心の重荷」と結びつけ、かつ老年期の展開まで視野に入れて論じたものは、管見の限り
では見当たらないようである。本稿では、それを論じることを課題としたい。

2、70歳のインタビューから

森崎の「積年の心の重荷」とは何か。70歳になったばかりのインタビュー記事から確認してみよう。

私は[・・・]「植民二世」でした。戦争が終わったとき、十八歳でした。私をつくってくれた「ふる
さと」は私のものではない、と知った。「ふるさと」をもとめて、身もだえするような「戦後」でし
た。七十歳になったいま、やっと何かを語れるように思います。[・・・]⁹

⁷ 『愛することは待つことよ ―二十一世紀へのメッセージ』9～10頁（藤原書店、1999.10）。この詩は後に
「いのちの母国をさがすおと」と題し、詩集『ささ笛ひとつ』（思潮社、2004.10）に収録されている。

⁸ 坂口博「初めに「いのち」ありき」（『現代思想―一月臨時増刊号 総特集 森崎和江』青土社、2022.10、55
頁）。大日方公男「森崎和江を読むための全著作ブックガイド」（森崎和江『やま かわ うみ別冊 いのちの自
然』アーツアンドクラフツ、2014.2、186頁）。なお、坂口は森崎思想の時代区分を、初期（1975年＝48歳
まで）・中期（1993年＝66歳まで）・後期（1994年＝67歳以降）としている。

また森崎の「いのち」の思想を論じたものに、高塚ルリ「森崎和江研究―いのちとエロス―」（『東アジア
日本語教育・日本文化研究』7、2004.3）、小林瑞乃「戦後思想史における森崎和江 ―〈対観念〉と〈いの
ち〉の言説をめぐって」（『年報・日本現代史』18、2013.5）、片岡龍「森崎和江の「いのちの原郷」から「土
着的近代」概念を再検討する」（『土着的近代研究』2、2024.3刊行予定）などがある。

⁹ 「故郷喪失 朝鮮への思い切り裂かれ（森崎和江の世界：1 語る）」（インタビュー・構成：河谷史夫）、
『朝日新聞』1997.4.21夕刊。

すなわち、「積年の心の重荷」とは、「植民二世」として、自分を養い育ててくれた「ふるさと」が他民族のものであったことへの無自覚に対する罪の意識と、失った「ふるさと」を渴求する苦しみである。インタビューは次のように続く。

ずいぶん生きたんですね、七十なの。体がお粗末で若いころから、あと三年生きよう、あと三年と願ってきた。三年たてば子どもが何歳になるからって。一日過ごすのに精いっぱい。気がついたらいま。いつも、こうです。/[...] 三十代四十代は心療内科のお世話になったり。[...] 時に道端にしゃがみ込みながら暮らしてきました。[...] /でも近年それはほとんどよくなりました。病院と縁は切れないけど。何かふっきたのかしら。朝鮮で生まれたことも、やっとな罪の思いをくぐり抜けて考えられそうな気がします。

70 歳になって、何が「ふっきた」のか。「罪の思いをくぐり抜け」、何を考えようとしたのか。が、その前に森崎の「積年の心の重荷」の軌跡を、もう少し丁寧に見ておきたい。

「若いころ」から体が弱かったというのは、終戦まぎわ（1945 年 6 月 19 日、福岡市空襲）頃からの体調不良（肺浸潤¹⁰）とそれによる療養所生活（1947～49 年）のことを指している。

療養所に入所した翌年 8 月に大韓民国が、9 月に朝鮮民主主義共和国が成立。退所の翌年（1950 年＝23 歳）6 月 25 日には、朝鮮戦争が始まる。その数日後、森崎は引き揚げ後に住んでいた街のバラックのそばの橋を渡ろうとしていたとき、突然の激しい痛みで襲われたという。『愛することは待つことよ』で、森崎は次のように記している。

[...] とある通りを私は歩いていた。戦火が心に浮かび、時空を越えた祈りにも似た思いが、詩へと動くのを感じた。と、突然、うっとうめくほどの激痛が全身を走った。私は橋の上に建ち、歯痛が去るのを待つように、じっと堪えた。[...] 何の痛みか説明がつかない。生まれ育ったことへの、炎のような叱責が全身を駆けぬけて地中へ去るに似ていた。[...] 以来、心が、昨日から明日へと、個的体験をはらみつつより大きく、民族の動きを問うかのごとく作詩へと動くと、しばしば一瞬の激痛が走った。¹¹

「生まれ育ったことへの、炎のような叱責」と表現（詩作）意欲との衝突が、森崎の体調不良と関係していることは明らかなように思われる。森崎にとって、「表現」とは「心を耕すこと」¹²、つまり自分を生まれ変わらせる営為であり、また「詩」とは、「生活のこととか、弟の死とかを越えて、やがてみんなの「明日」を開くための「自然や人びととのダイアログ」¹³だからである。

¹⁰ 森崎和江・中島岳志『日本断層論』64 頁（NHK 出版、2011.4）。

¹¹ 前掲、『愛することは待つことよ』17～18 頁。

¹² 森崎和江『地球の祈り』137 頁、149 頁（深夜叢書社、1998.5）。

¹³ 森崎和江「いのちの明日へと インタビュー」（『森崎和江詩集』141～142 頁、思潮社、2015。初出は『春秋』2009 年 10 月号）。

「植民二世」としての罪の意識と苦しみは、当然、森崎個人のものだけではない¹⁴。1953年（=26歳）に弟の健一が自殺。インタビューでは、次のように言及されている。

弟が自殺してしまった。取り返しのつかない悔いです。[···]「故郷がない」と私に書き残しました。故郷とは生きるための精神の源でしょう？ 思想以前、風土と歴史と自分と他者が混じり合ったカオスでしょう？ それなしに人は生きられないのよね。¹⁵

こうした「生きるための精神の源」である「カオス」としての「故郷」を、彼らは失ったのである。ところで、先の引用に「三十代四十代は心療内科のお世話になった」とあるのは、1961年（=34歳）に起こった事件が遠因となっている。「年譜」によって経緯を辿っておきたい。

事件3年前の1958年（=31歳）に、森崎は遠賀郡中間町（現・中間市）の採炭会社医師の旧宅及診療を借用して谷川雁と同居。上野英信・晴子夫妻と共同生活しながら『サークル村』を創刊。安保闘争が高まるなか、同誌は1960年5月に終刊した。谷川はサークル村会員を組織し、大正行動隊として大正炭鉱の未払い賃金闘争に参加。事件は、その翌年に起こった。

「五月、大正行動隊の妹で『無名通信』[1959年創刊]のガリ版刷りを手伝っていた若い女性が、深夜、炭鉱住宅の自宅で侵され、殺される。七月、『無名通信』廃刊。十二月、レイプ犯逮捕。大正行動隊員だった。死した女性の兄が、わが借家の前を走る香月線に投身死。起床不能に陥る。以後、地元の炭鉱で働いた人々の人間性に支えられつつ、朝鮮体験を客観する心のバネが回復してゆくまでの長い時間を過ごすことになる」¹⁶。インタビューでは、「身近にレイプで死者が出て以来、自分の思想性の浅さに直面。ことに政治優先の潮流に対して性とかいのちとかの内容を語る方法も場もつくれない」¹⁷と語り、次のように回想している。

私はみんなを呼ぼう。レイプについて話そうと言った。何とか思想的に乗り越えられるかもしれない。「君の気持ちは分かる」と彼[=谷川雁]は言いました。「でも、今はまずい」と。炭坑労働者を組織しての最後の闘いがちょうど山場で、仕方がないと私も思い、先延ばしにした。そうしたら……/エロスがわき出さなくなってしまった。[···]からだは現実的に妥協したところを許さない。[···]彷徨しました。渇きと飢えにつき動かされて。北へ南へ、ずいぶんと歩きました。¹⁸

¹⁴ 森崎の小学校同級生の多くが日本に戻った後に自殺したという（森崎和江『大人の童話・死の話』200頁、弘文堂、1989.1）

¹⁵ 「死のかたち 「故郷がない」 弟は逝った（森崎和江の世界：2 語る）」（インタビュー・構成：河谷史夫）、『朝日新聞』1997.4.22 夕刊。

¹⁶ 前掲、「年譜」351頁。

¹⁷ 「詩の仲間 筑豊に「いい日本人」がいた（森崎和江の世界：3 語る）」（インタビュー・構成：河谷史夫）、『朝日新聞』1997.4.23 夕刊。

¹⁸ 「いのちの風 繰り返し出発、それが人間（森崎和江の世界：4 語る）」（インタビュー・構成：河谷史夫）、『朝日新聞』1997.4.24 夕刊。

インタビューの最後のあたりで森崎は、自分はこれまで三度、敗北したと述べている。一度目は「植民地主義」に、二度目は「エネルギー政策」に、三度目は「高度経済成長による繁栄」に¹⁹。この事件が二度目の敗北に当たる。つまり、石炭から石油へというエネルギー政策の転換という「政治」を、若い仲間の性やいのちを無条件で受けとめる「エロス」(=「生命のエネルギー」)²⁰に、優先させてしまったのである。

そして三度目は、地球環境(自然、生命)の破壊であり、それは現在ますます深刻化している。にもかかわらず、森崎はインタビューの答えを次のように結んでいる。

人間は繰り返し出発するのだと思います。デュラス²¹も言ってるように、毎日死んで、毎日生まれ変わって生きる。私は自分を生き直したい。生き直すのに遅すぎるということはない。死ぬ瞬間までは生き直したい。[・・・]/女学校のクラス会で毎年二泊三日の旅に出るの。「やはり外地育ちは強いよ」とか言って(笑い)。みんな六十過ぎて軽やかな表情なの。²²

3、「くりかえし出発する」いのち

森崎が「人間は繰り返し出発する」という思想をまとめた形で述べたのは、68歳のときに刊行した『いのちの素顔』においてである。

私は、人はくりかえし出発する、と思うし、今また自分が新たな出発をはじめてしまったと意識している。/けれども、そうではなく、人々は常に反復すると感じている人びともすくなくないと思う。十七歳から日本で暮らすようになった私が感じたのは、日本人の生活感覚は、一体に、反復し、回帰するものとしてのいのちの全体像を持続しているようだ、ということだった。²³

日本的な「反復し、回帰するものとしてのいのち」ではなく、「くりかえし出発する」といういのちの感覚は、おそらく森崎が朝鮮で生まれ、育った²⁴ことと関係している²⁵。56歳のときの『慶州は母の呼び声 一わが原郷』で森崎は、自分の原型は朝鮮によって作られたと言う。

¹⁹ 前掲、「いのちの風 繰り返し出発、それが人間(森崎和江の世界:4 語る)」。

²⁰ 「エロス」について森崎は、「他人を無条件で受けとめる。まず受けとめる。いのちを。それをエロスと言ってみたり生命のエネルギーと呼んでみたり七転八倒するのだけど、なかなか。何と言ったらいい?エロス、やっぱりそう言うほかない」と説明している(前掲、「いのちの風 繰り返し出発、それが人間(森崎和江の世界:4 語る)」)。

²¹ マルグリット・デュラス(1914~96)。森崎はデュラス原作のラジオドラマ脚本をいくつか書いている。「モデラート・カンタービレ」(文芸劇場、NHK東京、1971年1月24日、再放送1月31日)、「ラ・ムジカ」(文芸劇場、NHK東京、1972年5月12日)、「これでおしまい」(NHK東京/FM、1996年12月12日)。

²² 前掲、「いのちの風 繰り返し出発、それが人間(森崎和江の世界:4 語る)」。

²³ 森崎和江『いのちの素顔』46頁(岩波書店、1994.9)。

²⁴ 大邱(~10歳)、慶州(11歳~)、金泉(16歳)。

²⁵ この点については前掲拙稿でも論じた。

私の原型は朝鮮によってつくられた。朝鮮のこころ、朝鮮の風物風習、朝鮮の自然によって。私がものごころついたとき、道に小石がころがっているように朝鮮人の暮らしが一面にあった。[···] /オモニの生活を知らず、そのことばも知らず、しかもその香りを知り、その肌ざわりを知り、負ってもらっては髪の毛に唇をつけ、やきいもを買ってもらい、眠らせてもらった。昔話をしてもらった。私の基本的な美感を、私は、私のオモニやたくさんの無名の人びとからもらった。²⁶

また、インタビュー翌年の『いのち、響きあう』では、次のようにも。

私は誕生以来の地の風物風土に養われた。心ゆくばかり呼吸した。愛した。私に生死への人間的な愛を教えたのは、あの半島の空と空気である。その中の生物の姿である。私は人間もまた鳥や草木と同じように多様に共生するものと信じて幼年期を育ったのだ。政治的侵略民族の自覚もなく。/そのことの罪深さ。私が心ひかれた朝鮮の老人や青年や少年。私へ無言のまなざしを注いだ彼ら。その沈黙の愛。それは民族文化を破壊する強者の論理への、批判を包みつつ、より深く、生物としての私にとどいた。²⁷

ここで「生死への人間的な愛」「沈黙の愛」と呼ばれているものは、まさに先に見た「エロス」であろう。エロスによって新たな生命が誕生する。それこそが新たな「出発」なのである。

森崎はまたエロスを「社会的父性、社会的母性」とも呼ぶ²⁸。74歳のときの『いのちの母国探し』では、

社会的母性・父性とは、わが子を産み育てる私的で個人的な性へと個々のいのちの継承を閉ざすのではなく、職場などあらゆる生産現場のありかたをも、いのちの継承の方向へと働かす人間的エネ

²⁶ 森崎和江『慶州は母の呼び声』ちくま文庫版、17～19頁（筑摩書房、1991.9）。同書単行本は1984年3月刊行。

²⁷ 森崎和江『いのち、響きあう』121頁（藤原書店、1998.4）。

²⁸ 「私たちは、時空を越えて生きるいのちを想像します。植物や動物をふくめたいのちの森を。いのちを育てたいのです。こんな心の働きを、私は社会的父性、社会的母性と呼んでいます。」（森崎和江『いのちを産む』193～194頁、弘文堂、1994.2）。「今日この頃、痛切に思うのは親心とは血のつながりへのエゴイズムではないということ。次世代への、ひらかれた心とでも言えばいいのか、さしあたって私は、社会的父性、社会的母性と呼んでみたり、社会的親心とつぶやいたりする。鳥が雛へ餌を運ぶように飢えさせない働きの事。」（「親心：1 わが卒業 森崎和江（ちょっと深呼吸）」、『朝日新聞（西部）』2000.2.20朝刊）。「私は、子のあるなしにかかわらず、社会的な活動の場でこそ、未来の生命への社会的父性社会的母性とは何かを自問しつつ、生産体制をととのえてほしいと痛感するのです。[···] 子ども時代を都市ですごそうとも、その創造力のじゃまをしない子どもの時空が、土や水や小さな生き物たちの草むらと共にあるような、そんな文明を育てあいたい」（『いのちへの手紙』37頁、お茶の水書房、2000.8）。「それ[=社会的父性・社会的母性]は福祉行政ではない。男女共同参画社会でもない。ましてや両性を、生殖機能に限定しての呼称ではありません。母性や父性は。それは、生命の連続性に関する人間的な視点、思索、労働。」（森崎和江『見知らぬわたし 一老いて出会う、いのち』98頁、東方出版、2001.4）。

ルギー。私はこのごろそれを「エロス」って言ったりするの。いのちに対する愛は「エロス」、セックスじゃない。エロスってもっと深いものだ。八十のばあさんにだってエロスはある。自己実現ってというのは、“他のいのちを受け止める力”のことをいうのよ [···]。²⁹

こうしたいのちへの愛（エロス）を、森崎は朝鮮の風物風土の中で養われたのである。

私は子どもの頃から鉛筆やクレパスをおもちゃにして一人遊びをしていました。そして、いつしか、心やからだに響いてくる自然や人や生きものとの、共振ともいえる世界を感じていたようです。それはかつての朝鮮で生まれ育った私が、話しことばのちがう人びと—朝鮮や中国やロシアやヨーロッパの人たちもいました—の、大人たちをも、ちいさくちいさく思わせるほどの美しさと広さで、朝や夕方空の色調を変えることに心打たれ、ぽろぽろ涙をこぼしていたことなどに関連していると思います。小学校入学前後から、しばしば、そうした体験をくりかえしました。/その、自然界といのちとのシンフォニーへの愛をはぐくんでくれたのが、「日帝時代」の大地であったこと、また、その大地に響きわたっていた歌とリズムであったことが、つらくて、幾度となく崩れました。³⁰

「自然界といのちとのシンフォニーへの愛」を養ってくれた「ふるさと」が、他民族の風土風物であったことを自覚できなかった「私」とは何か、他民族の土地を侵略した日本民族の作っていた「国家」とは何か。「文化や民族や性など自分とは異質な他者 [···] を受け止め」³¹、互いに生かし合える「わたし」、また「くに」は、どこにあるのか。68歳（『いのちの素顔』）の森崎は、次のように呻いている。

敗戦は私という個体の正体を知らせたのだった。個の条件としての、日本人。日本人という民族。その民族が作っていた国家。私は、私の条件としての民族の歴史と原罪に打ちのめされながら、でも、その民族性と私が心に描く民族とは同じじゃなかったよと、叫びたい思っていた。/しかし、ここからの出発しかない。/自分の生存はまちがっていた、という、生まれたことへの罪意識が全身をおそう。選択の余地なく、私は否定されるべき存在なのだった。朝鮮民族から。その歴史から。その風土から。/あの風土によって養われた生命。感性。考え方。言葉のニュアンス。そのかたまりの私。/私はどこへ向かって、どう生きればいいのか。どう生きよう。³²

「人びとはくりかえし出発する」と述べた森崎の生き直しの「旅」は、まさにここから始まったのである。

4、日韓を吹きわたる海風

森崎の「北へ南へ」の生き直しの「旅」の詳細を辿る紙幅の余裕は、本稿にはない。ここでは、先に引

²⁹ 森崎和江『いのちの母国探し』233～235頁（風濤社、2001.9）。

³⁰ 前掲、『地球の祈り』168～169頁。

³¹ 前掲、『いのちの母国探し』195頁。

³² 前掲、『いのちの素顔』49～50頁。

いた『愛することは待つことよ』巻頭の詩に、「植民二世のわたしは/東海の波しぶく列島で生き直して/
あなたの故郷に詫びたいと/母国を探し地下坑をゆきました//風の便りのあなた/同時代を生きたあなた/
民族を問い性を問いのちを問いつつ/互いにアジアを踏みわたり/ [・・・] あなたと聞きのちの母国を
探す音 [・・・]」とあったように、「いのちの母国」を探す旅には、当然韓国への旅も含まれることに注意
しておきたい。

森崎が戦後初めて韓国に渡ったのは1968年(=41歳)である。慶州中高校創立三十周年記念に招待
された森崎の亡父の代理として祝賀会に出席し、父の教え子らに会ったこの旅については、『慶州は母の
呼び声』余章に記されているので、詳細はそれに譲りたい。

『慶州は母の呼び声』を刊行した1984年(=57歳)に森崎は、九州大学文学部留学生で植民地当時の
金泉高等女学校の後輩に当たる蔡京姫(『からゆきさん』の韓国語翻訳者)と出会う。その翌年1月、ア
メリカ在住の金泉出身で森崎の父を知る韓国人から、突然手紙が届く。これらの偶然が、この年(1985
年)の韓国再訪、そして金任順との再会につながるのだが、その詳細は『こだまひびく山河の中へ—韓
国紀行』(朝日新聞社、1986.7)にまとめられている。ここでは「年譜」に拠って簡単に見ておこう。

一月、アメリカ国会図書館東洋館長の宋昇奎より、『慶州は母の呼び声』を読んで、金泉中学当
時の校長の娘と知った、との便りと、東洋館の森崎和江図書目録とを受けた。彼の父・宋昌根博士
は韓国神学大学学長。朝鮮戦争時に北へ拉致され、生死不明。三月、蔡京姫の帰国に同行し韓国へ。
ソウルで旧友の金任順と連絡がとれる。[・・・] ソウルからの帰路、巨済島へとまわり愛光園訪問。金
任順の夫は朝鮮戦争で生き別れとなり生死不明の宋昇奎であった。³³

その後、森崎は「繰り返し韓国への旅」を重ね、「金任順さんとは日本の諸地方も共に歩」いた³⁴。こう
した交流の積み重ねが、ついに先に見た1998年(=71歳)の宗像市・福岡市での金任順との対談へ、そ
して2000年からの愛光園修学旅行による市民交流へと結実したのである。78歳のときの『語りべの海』
で、森崎は「愛光園との交流が私個人を越えた」と述べ、金任順に次のように語りかけている。

あなたのおかげで体中の氷が溶けたよ、有難う。[・・・] 私ね、子どもの頃のポプラの木に抱きつい
た時、樹液が流れる音を聞いたのよ。あのいのちの音。ね、私も水になって海に流りたい。この海峡、
この海の水に。[・・・]³⁵

³³ 前掲、「年譜」136頁。なお、宋昇奎氏は、尹東柱(1917~1945)と共に京都で捕えられ福岡刑務所内で
獄死へと追われた宋夢奎(1917~1945)の従兄弟であり、また尹東柱は宋夢奎の従兄弟(森崎和江『いのち
への旅—韓国・沖縄・宗像—』171頁、岩波書店、2004.1)。父の宋昌根(1898~1950?)の伝記・論説
文・逸話・追慕文は、晩雨 宋昌根先生記念事業会『晩雨 宋昌根』(善瓊図書出版社、1978.4)にまとめられ
ている。宋昌根は1922年に来日後、東洋大学に入学したのは、柳宗悦(1889~1961)に会うためだったと
いう(『晩雨 宋昌根』29~30頁)。

³⁴ 「弁当：1 子ども天国 森崎和江(ちょっと深呼吸)」、『朝日新聞(西部)』2002.9.29朝刊。

³⁵ 前掲、『語りべの海』172~173頁。

「体中の氷」が「積年の心の重荷」であること、ポプラの「樹液が流れる音」が森崎の幼魂を養ったいのちへの愛（エロス）であることは³⁶、言うまでもないだろう。しかし、2005年3月に島根県議会が「竹島の日」条例を制定したことで、その年の愛光園修学旅行は中止に追い込まれる。

だが、森崎は逆にそれを機として「具体的に交流の幅を次世代から孫世代へと連結させる役割を果たそうと、金任順に「竹島問題で会えない日本海、その東海を越えて、愛することは待つことよ³⁷、を若い世代へあなたの声と言葉で話してほしい」と、宗像市にある福岡教育大学での講演を依頼し、実現させる³⁸。

森崎はこう記している。

私は十七歳の最後の数か月を金^{キム}泉^{チヨン}高女でイムスン（金任順）さんと机を並べた。その十代の出会いが、わがいのち綱となっている。竹島・^{トク}島^トがあろうとも、十代の出会いも、夢も、地球をめぐる。いつかは愛光園の海に向かった丘の小道や畑や作業所で、一粒の種子がこぼれるやも知れぬ。草も芽を吹く。根をのばす。誰かの心の畑にも。³⁹

70歳のインタビューで「生き直すのに遅すぎるということはない。死ぬ瞬間までは生き直したい」と述べていた森崎の生き直し歩みは、「海に生きた人びとの古代からの生命観・自然観に育てられながら」、やっと「ここまで来ることができた」のである⁴⁰。

³⁶ 「私が生まれたのは、玄界灘のあちら側。かつて日本が植民地とした他国である。/その人間世界の中で、私の幼魂を無条件に受けとめてくれたもの。その記憶がよみがえる。/[...] ある夕ぐれ、父と散歩をした。小学校入学前の子には天を突く大木とみえたポプラが数本、並んでいた。その大きな木に抱きついて目をつぶると樹液の流れる音がした。天の水だと思った。目をひらいて見上げると、大木の梢の、その奥に幾千の雀が鳴いていた。雀と私との間を天水が流れた。」（前掲『いのちへの手紙』26頁）。また前掲『見知らぬわたし』27～29頁を参照。

³⁷ 『愛することは待つことよ』の書題は、同書に載せられた金任順自身のことば「わたしね、教えられるのよ、あの子たちに。[...] 育てるということを教えられるの。愛するということ。/時間がかかる。なんでもそうだけど。どんな人間でも、ああこれがその人の力だという能力がかくれているのよ。それをね、ゆっくりとね。育てる。愛するのよ。待つよ。十年十五年。生涯待てないことはない、わたし」（208～209頁）から採られている。

³⁸ 前掲、『語りべの海』179～186頁。なお愛光園修学旅行は翌2006年無事再開、「福岡教育大学社会福祉学科や生涯教育学科の教授・学生達と市内の福祉施設関係者を加え、共に交流会をたのしんだ」（前掲「年譜」362頁）。

³⁹ 前掲、『語りべの海』184頁。

⁴⁰ 「ふるさと：1 ありがとう 森崎和江（ちょっと深呼吸）」、『朝日新聞（西部）』2005.2.20朝刊。「海に生きた人びと」というのは、ここでは「宗像の風土」に包まれた「むなかた自由大学」（1988～2003年）や「むなかた市民大学・ゆめおり」（2003～2009年。森崎が学長を務めた）のボランティア市民を指す。また、宗像

80歳のときに発表された「海風」という詩を挙げておこう。

あの日の静かな真昼時/日韓草の根交流の小さな小包をぶらさげて/郵便局へと いつもの坂をくだ
っていた//人も車も食事の時刻/行き交う音も絶えていた/と 突然 坂道なかばで/がくり/と 右
のひざ//あっ/いたたた……/動きがとまる/ゆらぐ体/反射的に一本足の中腰で/痛い!//一秒二秒
しっかりしなさい/五秒六秒 堪えなさい/自分を叱る高齢期//あの真昼から三年がすぎ/くずれゆく
体内自然をいたわりながら/交流会を準備する/わたしは植民二世 遙かな過去の幼少期/幼い詩を
書いていた/朝陽に染まる七色の雲のあざやかさに/涙たれつつ言葉をさがしたその大地//生皮引き
剥ぐ戦後の年月/オモニ達のいのち香る海風に身をさらし/にほんとは?/いのちとは?/と 旅寝を
重ねた/いつの日か 原罪の地に立ち得るわたしへ/生き直したいと/列島を北へ 南へ//戦後六十年
を過ぎ ようやくのこと/次世代孫世代と共に交流の海を渡りあう/地球温暖化が加速する 二十一
世紀の文明/微塵は海に散ろうとも/陽はのぼる東海^{トシヘ} その日本海//丸い地球よ 宇宙の星よ/あした
生まれるあなた方よ/異質な文化を繕いあひながら/未来へとわたしも夢をしぼる⁴¹

「くずれゆく体内自然」を感じながらも、次世代・孫世代と共にし合う日韓草の根の「交流の海」に、「いのち香る海風」が吹きはじめたのである。

5、「おはよう今朝のわたし」

いつの頃からか、森崎は朝起きると、自分に挨拶するようになったという。

68歳のときの『いのちの素顔』で、「人びとはくりかえし出発する」と述べた後に、「私たちのからだの細胞が新陳代謝しつつ、きのうから今日のいのちへと変転する」ように、「私は毎朝、生まれたばかりの私に挨拶する」と記している⁴²。

長い引用が続くが、70歳代前半の文章をいくつか見てみよう。

私は朝鮮で生まれ育った自分とその時代の他民族との共通体験がつらくて、引き揚げ後を暮らしながら、生涯かけてこの日本で、私自身を、生まれ変わらせたいと願ってきました。そう自分へ求めながら、でもすぐにめそめそする心を、だめだめと叱り叱り、とうとう老いの坂なのです。[……] 帰国以来自分とは何だろう、女とは民族とは等々と歳月を重ね、そして或る朝ぼらけ、あっと思った。見知らぬわたし、今生まれたわたしがいます。しびれがひどくて、リウマチは眠っている間に全身をのんびり歩いているのでしょうか。体はこわばっているのに何か、ちらちらと泳ぐ、いきいきと泳

海人族の「古代からの生命観・自然観」を探る森崎の旅は、40歳代から晩年まで及んでいるが、本稿では詳述する余裕がない。なお、森崎は宗像は「日本の海女の発祥の地」であり「彼女たちは「自分の故郷は朝鮮たい」と口を揃えます」と述べている（「巻頭インタビュー森崎和江：いのちの声を掬う旅」、『やまかわうみ：自然と生きる自然に生きる：自然民俗誌』4号、アーツアンドクラフト社、2012.3）。

⁴¹ 森崎和江「海風」（『神奈川大学評論』57、2007.7。前掲『やまかわうみ別冊 いのちの自然』所収）。

⁴² 前掲、『いのちの素顔』45頁。

ぐ。/和ちゃんおはよう。私は心で声をかけました。今生まれたのね、なんてちいさな。魚のような……知らないわたし……/今日のわたし、おはよう。挨拶をした。痛む体を起こす。そしてようやくのこと、私は気がついたのでした。私にとって納得のいく自分に出会うことはどういうことなのかを。それは生まれたままの裸のいのちへとくりかえし帰ること。それら裸の生命界とひびき合っているものへ目を覚まし、きのうのわたしとさよならをして日々歩く。さ、起きましよう、今日のわたしへ、なのでした。/私はそのわたしと歩きます。今日一日可能なかぎり裸のいのちを、社会や文明の基盤へ再構築するすべを見つけたい。肩書社会や武力文明ではなく。⁴³

今年も私は、見知らぬわたし自身に、ふと気づく折があることを願っています。[……] /見知らぬわたしを感じずる瞬間なんぞ、それは単に、トシをとるということかもしれません。[……] /いま、世界は、あらゆる分野にわたって現代文明の検討期に入りました。過去は参考にならぬ文明へと。私もその中のひとつぶです。明日のあることを願うなら、他のひとつぶひとつぶを生かすエネルギーを自分自身に呼びさますよりほかにない。見知らぬわたしに出会いたい。わが心身のいのちへの愛をよみがえらせた。/私はわかいころから、心身不調がつづいていました。その私にできることは、[……] 心に夢を描くことでした。半面からいえば、自分とたたかうこと、社会へ声を出すこと、でした。⁴⁴

ここから読み取れることは、「見知らぬわたし」と出会うというのは、単に老いを感じるということではなく、「生まれたままの裸のいのち」を自覚すること、「他のひとつぶひとつぶを生かすエネルギー (=「わが心身のいのちへの愛」)、つまりエロスを自分自身に呼びさますことであり、またそれは森崎にとって、「今日一日可能なかぎり裸のいのちを、社会や文明の基盤へ再構築」することによって、これまでの「肩書社会や武力文明」ではない「過去は参考にならぬ文明」を共に生み出そうとする、自分とのたたかいであったということである。

ただ、そのたたかいは決して悲愴感漂うものではない。71歳のときの文章では、互いに子育てをした親友の死、若い友人の息子の死、幼児の生死へのむきあいなどについて、「自然界はふかぶかと、だまっのちたちを抱く」と述べた後、こう言っている。

私も、吹く風に耳を傾け自分とたたかっていたい。いつも。たのしく。くりかえし生まれたままの裸の自分に立ちかえって。/いえ、生まれた裸はこのような皺くちゃ女ではありませんでした。で、きのうの自分をさらりと捨てて、朝はいつも挨拶をします。いま生まれたばかりの今日の自分に。/おはよう、今日のわたし、と。さあ、しっかり旅をしようね。声が聞きたいね。あの人この人、あの山あの川。あの水と、響きあいたいよ。⁴⁵

⁴³ 森崎和江「生まれたままの裸のいのちへ帰る（自分と出会う）」、『朝日新聞』2000.9.25夕刊（のち前掲『いのちの母国探し』に収録）。そのほか、『いのちの母国探し』106頁、129頁、176～177頁、前掲『見知らぬわたし』210頁、前掲『いのちへの旅』223頁なども参照。

⁴⁴ 前掲、『いのちの母国探し』6～7頁。

⁴⁵ 森崎和江「死を見つめ、自分と向き合う」、『読売新聞（東京）』1999.4.6朝刊。

森崎にとって毎朝の挨拶は、昨日の自分を捨てつづけるための掛け声、死ぬまで生き直つづけるための自分への叱咤と言ってよいが、同時に、そのたたかいは人びとや自然と響きあうことで、生まれ直していく楽しい「旅」なのである。

いのちの響きあいは、同時代の人びとや自然とだけでなく、「自己へと連続してきた生命界と、生命を存続させる自然界」との共鳴である⁴⁶。73歳の『見知らぬわたし』では、こう述べている。

そういえばいつしか、朝ぼらけにうつらうつらと目覚める頃「おはようわたし」と呼びかけるようになった。いつ頃からだろう。細胞の新陳代謝が、年齢とともに、生命の誕生やその再生と重なりながら心にとどく。いま生まれたわたし、生まれつつあるわたし、が目覚めに重なる。きっと、個の死とはこんなことよね、と思ってほんわかとしてくるの。/[...]はるばるとした生命体の連続性と個。その自然界の時間空間 [...]。死ぬことは、ぬくもること [...]。⁴⁷

死は生と対立する冷やかなものではなく、日々古い細胞が死んでは、新たな細胞が生まれるように、生と連続したいのちの温もりとされる⁴⁸。

また、74歳の『いのちの母国探し』で、死は「生きることのまん中に坐っている大切なやさしさ」、あるいは「生きることへの自覚と自立の基盤」と言い、次のように述べている。

私たちは個人の死しか問えないまま、今日まで来ています。いや、個人の、というよりも自分の、というべきでしょう。[...]が、実のところ、個々の死のおそれや不安を救っているのは、個人の死ののちに、なお、るいゝとして生きつづけている人びとの、生があること、なのではないでしょう

⁴⁶ 「旅をしながら私は自問するのです。/自己実現とはわが一代の権利の主張ではないでしょう、と。そうではなくて、自己へと連続してきた生命界と、生命を存続させる自然界とが、私の心身へも響いていることを、しっかりと受けとめて、同時代の異性の他者と共に、未来へのメッセージを送ることでしょう、と。/それを私は何と呼べばいいのか、いまだに定まりません。やむなく、社会的母性社会的父性を育てたいと語り、そのエネルギーをエロスと呼んでいます。そして、次の世紀へと向けて、一代主義を超える生命の連続性の哲学が、あらたな文明を生んでくれることを願っているのです。」(前掲『いのちへの手紙』40頁)。

⁴⁷ 前掲、『見知らぬわたし』55～57頁。また、61歳のとき文章では、「個人は消え去ろうとも、私たちは人間たちがなおいつまでも生き継いでいくことを信じているのです。[...] /人間群のいのちのぬくもり。それがもし自分の死とともに地球上から全滅するのだとしたら、私たちは宗教さえ生み出す力を持ってないと思います。[...] /たとえシングルライフをつらぬいて子産みを拒否しようと、子の誕生を望みながらわが子を持つてぬ生活をよぎなくしようとも、人間が人間であるかぎりには、人間一般は生殖年代になると子を産むのだということを、既成の事実として知っていましたから、人間たちの永生に抱かれて私たちは死ねたのです。

[...]ひとりひとりの生涯はおわっても、人びとが生きていてくれること、そのことへの信頼が、個体の死をどれほどあたためていることか、はかりしれないと私は思っているのです」(前掲『大人の童話・死の話』173～174頁)。

⁴⁸ 「死は生きつくすことなのです。/ひとりひとりのいのちを燃えつくすことなのです。」(前掲『大人の童話・死の話』224頁)。

か。人類の生の永続への祈りこそ、死をみつめることのころざしだと、私は思うのです。⁴⁹

「一代主義」の死生観を超えた、いのちの永続する世界（「いのちの母国」）への祈り、志。しかし、森崎はそうした世界が見えてくるのは「六十代では無理」であり、「からだはぼろぼろになりながら、やっと見えてくる」と言う⁵⁰。体力も意識も老いていくが、「そうなる頃にいきいきと働くもの」、「若い知恵が見落としていた、生命体の応答」があると言うのである⁵¹。

自分を知りなさい。自分のからだに静かに心を澄ませてください。[・・・] 老いてなお、今朝のわたし
が生まれているよ。いえいえ老いつつ生きてこそ、出会うわたしです。その日の朝の新しいいのち。
生まれたばかりの新しいいのち。おはよう今朝のわたし、と挨拶をして、今朝のわたしと共に可能な
限りの魂を燃やしましょう。⁵²

「若者が個性的な人生を求めるように、高齢者も個性的な日々を求め」る⁵³。しかし、われわれの文明には、まだ「他者としての高齢者が出会っている、その日のいのちの音が聴こえていない」⁵⁴。これまでの「老人老女」の概念に代わる、「老いの自然さの、正確な話ことばも、書きことばも、まだ生まれていない」⁵⁵。

そして、森崎にとって、老いつつ生きて出会う新しいいのちを自覚し、それを「表現」することは、個人的な死生観確立のためなどではなく、共に生きあい、いのちを支えあえる社会を開くための、自分を生き直すたたかいなのである⁵⁶。

こうした「ころざし」によって、玄界灘をはさんだ日韓草の根の「交流の海」にいのち香る海風が吹きはじめたことは、あらためて指摘するまでもないだろう。

6、おわりに

70歳代後半に入ると、森崎は日々の微妙な体調の変化に苦しむようになる。

⁴⁹ 前掲、『いのちの母国探し』205～208頁。

⁵⁰ 前掲、『見知らぬわたし』198頁。

⁵¹ 前掲、『見知らぬわたし』122頁。

⁵² 前掲、『見知らぬわたし』210頁。

⁵³ 前掲、『いのちの母国探し』202頁。

⁵⁴ 前掲、『見知らぬわたし』198頁。

⁵⁵ 前掲、『いのちの母国探し』190頁。

⁵⁶ 「家庭はいのちをはぐくんだり、憩わせたり、その最後をみとったりしますが、それが不可能な晩年も少なくありません。また一般に、高齢者は伝達機能を失いがちです。そうした状態を支える設備が、多様な形で社会的に必要ですが、同時に私たちも、職場と家庭を往来するだけの生き方から自立して、助力を要するいのちたちの支えとなる生き方を、社会参加の一端として身につけたいと思います。」（前掲『いのちの母国探し』204頁）。

七十代のなかばを越してから、私は朝ごとの体調の微妙な変化に苦しみ通した。それまでのように、おはよう和ちゃん、と自分へ挨拶するときの、何げない手足の伸びさえ、体のどこかが引き攣るのだ。若いころから睡眠不足がちだった。が、痙攣はつらい。⁵⁷

そして、脳神経外科の主治医からもらった睡眠導入剤で、なんとか5時間安眠するといった「老いの自然を辿」る日々の中で、「母胎内で育ついのちのように、自然胎内ではぐくまれる老いのいのちもその時空に朝ごとに生まれている」ことを、近年初めて知ったという。

それまでは、「見知らぬわたし」に出会いたいと願っていても、昨日のわたしを引きずったまま、「なかなか今日のわたしとは歩けない」ことも多かったが⁵⁸、「七十代も後半の私には、日々、見知らぬわたしが現れ」るようになったのである⁵⁹。

そして、80歳になった森崎は、若い友人夫婦（九州大学大学院人間環境学研究院の高橋勤教授と対馬出身の高橋三恵夫妻）へ次のようなハガキを送っている。

なんだか私は今になって、この海辺、いえ玄界灘のイメージが、三恵さん、あなたのご郷里[=対馬]の方々と共に浴びて来た生命の海へとよみがえっています！いま、気がついたの。バンザーイ！有難う！いのちの底から、一人の帰郷の女へ帰っています。大丈夫、今生まれたよ、和江さん、一九二七・四・二〇生まれの私の再生です。⁶⁰

その数年後（2010年）、日本は人類未踏の「超高齢社会」に突入。冒頭に掲げた写真の森崎和江83歳の年である。

晩年の森崎は、認知症となり施設に入って過ごした⁶¹。上野千鶴子（1948～）によれば、認知症になった森崎について、息子の松石泉（1956～）からの手紙に「母はいま、森崎和江からも降りて、おだやかに過ごしております」とあったという。

90歳を迎える2017年1月には、脳梗塞を発症して福岡県内の病院に入院。そして2022年6月15日、急性呼吸不全により95歳で死去⁶²。息子の松石は、森崎がエンディングノートに残した遺志どおり、「くえいっしょ倶会一処」と刻まれた墓に葬ったという⁶³。

この墓について、森崎自身は次のように記していた。

私は、この地[=宗像市]へ転居してきた折に、新興墓地に小さな墓を求めました。今もって石造りの

⁵⁷ 「誓い：1 明日のあなたへ 森崎和江（ちょっと深呼吸）」、『朝日新聞（西部）』2004.12.5朝刊。

⁵⁸ 前掲、『見知らぬわたし』197～198頁。

⁵⁹ 「始まり：1 輝く命の波紋 森崎和江（ちょっと深呼吸）」、『朝日新聞（西部）』2004.1.11朝刊。

⁶⁰ 高橋勤「海を見るひと」（『森崎和江コレクション—精神史の旅 月報1』3頁、藤原書店、2008.11）。

⁶¹ 上野千鶴子「わたしたちはあなたを忘れない」（前掲『現代思想—一月臨時増刊号』330頁）。

⁶² 『朝日新聞（西部）』2022.6.19朝刊。

⁶³ 『朝日新聞』2022.9.10夕刊。

墓は好みませんが、しかし、子も孫も、血縁の私よりも、よりひろくふかく日本の風土を幼魂に吸って育っているのです。その縁者への思いのままに、墓石に「俱会一処」と彫ってもらいました。いつの日か、日本のどこかに、「みんなの森」として散骨が育つ世紀になったとき、私もその森へ加えてください。⁶⁴

ところで、森崎が「石造りの墓」を好まないことについては、次のようにも述べられていた。

敗戦のあと帰国した私は、ずいぶん長い年月、日本の墓地の、墓石の姿になやみました。/あれは美しい姿ではありません。[···] /私は、なぜ日本人は墓をあのように不粋で現世執着型にせねばおれないのだろうと、くるしい思いでした。何しろ慶州の王陵に打たれていた私ですから。私は、山裾のあたりにこんもりとちいさな土盛りをし、草でおおわれていただけのあかるい朝鮮人の庶民墓をも、つくづくと、やさしい人間性を持っていたな、と、思いかえしていました。⁶⁵

「××家之墓、と彫りつける生者主義とその形」を嫌いながらも、しかし、森崎は新興墓地の「一般向けの墓」を墓地とした。それは「私はいつも、ごくふつうの生活に足をつけていたい」からである。だがせめてもの思いで、「有縁無縁の者たちがともに一処にあつまって会うこと」を意味する「俱会一処」の字を刻んだのだという⁶⁶。

それは、森崎にとって、生きていくということは「対話する空間を作り合うこと」⁶⁷だからであり、その対話には、世代・階層・性別・文化を異にする者、さらには生死を異にする者もふくまれるからである。なぜなら、死とは新しい自分と出会うための、いのちの温もりなのだから。

最後に 78 歳のときの詩を掲げておこう。

おはよう/おはよう/今朝のわたし/目覚めたわたしは呼びかける/重たい両腕両脚の/痛みをともなう
目覚めです/七十八歳四か月/真夏の涼しい朝ぼらけ/寝たまましずかに両腕を/まっすぐ空へと伸ば
します/今日のいのちをこの腕で/しびれと痛みの両脚で/受けとめ支えて歩きます/仏は常にいませ
ども/うつつならぬぞあわれなる/人の音せぬあかつきに/ほのかに夢にみえたまう/歴史をつむぐ人
の世の/今朝のいのちへ流れます/しびれを払う両腕の/目覚めの運動をくりかえす/起きあがる力の
準備です/いのちの炎が きら きらり/今朝のわたしよ/おはようさん/しっかり いのちを受けな
さい/いいですね 起きますよ/和ちゃんさわやかに立ちなさい/あなたへ 今の肉体をあずけます/
庭に一声 虫の声/つづいて一声 蟬の声/夜明けへと/生きとし生けるものたちの/いのちの/時刻が
ひらきます⁶⁸

⁶⁴ 前掲、『いのちの母国探し』236～237頁。

⁶⁵ 前掲、『大人の童話・死の話』126～127頁。

⁶⁶ 前掲、『大人の童話・死の話』126、128頁。

⁶⁷ 前掲、『森崎和江詩集』142頁。

⁶⁸ 前掲、『語りへの海』77～79頁。

森崎老年期の生と思想は、「いのちの時刻[=Kairos]」を開きつづけ、日々「見知らぬわたし」に出会う旅であったということを、本稿の結論としたい。

1. 머리말

초고령사회의 웰에이징과 웰다잉에 대해 한일 양국이 함께 이야기하기 위해 재작년 95 세로 타계한 일본의 시인 겸 논픽션 작가 모리사키 가즈에(森崎和江, 1927~2022)의 노년기의 삶과 사상을 중심으로 소개하고자 한다¹.

모리사키의 저서 2 권(『카라유키 씨』 1976, 『경주는 어머니가 부르는 소리 -나의 고향』 1984)이 한국어로 번역되어 있으나², 일본에 비해 한국에서는 모리사키에 대해 거의 알려지지 않은 것 같아서 우선 83 세 때의 사진부터 소개하겠다.



앞줄 가운데 보라색 모자를 쓴 여성이 모리사키 가즈에다. 장소는 한국 김해국제공항. 사진은 '유타카 칼리지'(지적장애 청년들의 4년제 복지형 대학) 총장의 2010년 3월 23일 블로그에서.³

¹ 모리사키(森崎)는 일본이 '고령사회'에 진입한 1995년에 68세, '초고령사회'에 진입한 2010년에 83세로, 그의 노년기(65세~)는 마침 '고령사회'에서 '초고령사회'로 넘어가는 시기와 겹친다.

² 모리사키 가즈에 저, 채경희 번역 『쇠사슬의 바다』(박이정, 2002.9), 모리사키 가즈에 저, 박승주·마츠이 리에 번역 『경주는 어머니가 부르는 소리 식민지 조선에서 자란 한 일본인의 수기』(글항아리, 2020.11).

³ <http://blog.livedoor.jp/kyf2/archives/51367731.html>

모리사키와 나란히 서 있는 빨간 스카프를 두른 여성은 한국 거제도에서 지적 장애아를 위한 고아원 '애광원'을 설립한 김임순(1925~) 원장⁴. 그녀는 모리사키의 아버지가 경주중학교 초대 교장에서 금천중학교 교장으로 부임함에 따라 대구고등여학교에서 금천고등여학교로 전입했던 시절의 모리사키의 동창생이다. 모리사키 일행은 이 '애광원'을 2010년 3월 21~23일에 방문했다.

이 사진으로부터 약 두 달 후인 5월 17~19일, 이번에는 애광원 원생들이 수학여행으로 김임순 원장 등과 함께 일본을 방문해 모리사키가 살고 있는 지역 주민들과 교류했다. 당시 아사히신문의 기사(「수학여행, 한일 인연 10년...작가 모리사키의 우정...시설 원생 등 17일 무나카타(宗像)입성」)를 통해 이 교류의 역사를 살펴보자.

한국의 지적장애인 시설 '애광원' 원생들이 17~19일 수학여행으로 일본을 방문해 무나카타시(宗像市)와 구라테 마을(鞍手町) 시설 관계자들과 교류한다. 동시(同市)에 거주하는 작가 모리사키 가즈에 씨(83)가 16세까지 지냈던 한국을 재방문해 맺은 우정을 바탕으로 시민 교류가 확대되어 올해로 10주년을 맞이했다. / [...] 모리사키 씨는 1944년 봄, 구아오키무라(현 구루메시) 출신인 아버지의 인연으로 후쿠오카 현립 여자전문학교(현 후쿠오카 여자대학)에 입학, 일본에서 종전을 맞이했다. 85년 방한 시에 김씨와 재회했다. / 김씨는 한국전쟁 당시 거제도로 피난을 갔다. 전란을 겪으며 전쟁고아들을 돌보기 시작했다. 애광원은 고아원에서 지적장애를 가진 고아들, 나아가 일반 지적장애아를 위한 시설로 전환했다. / 모리사키 씨와 김 씨 두 사람은 98년 무나카타시에서 '일본의 어머니, 한국의 어머니'라는 주제로 대담을 나눴다. 이를 계기로 애광원 원생들의 무나카타 수학여행이 2000년에 시작되었고, 수용을 위해 시민들의 뜻으로 만든 '애광회'가 발족했다. / 3회째인 02년부터 격년으로 이어져 올해로 7회째이다. [모리사키 씨는 "가까운 곳에 있는 양국의 서민들이 다음 세대, 손자 세대까지 친근하게 교류할 수 있었으면 좋겠다"고 말했다.⁵

'모리사키 가즈에 자찬(自撰) 연보'(이하 '연보')에 따르면, 1998년 12월 14일 '무나카타시 교육위원회 주제로 세계인권선언 50주년 기념으로 한국의 오랜 친구이자 거제도 애광원 설립자인 김임순과 대담. 같은 날 후쿠오카시 여성센터 아미카스에서 "한일 풀뿌리 교류, 생명의 울림"을 김임순과 함께 이야기 나누다" 라고 적고 있다⁶.

이듬해 10월 모리사키는 김임순으로부터 들은 이야기를 바탕으로 『사랑하는 것은 기다리는 것이야 - 21세기를 향한 메시지』를 출간하고, 그 인세를 애광원에 기부했다. '연보'에서 모리사키는 "오랜 세월의 마음의 짐을 조금이나마 덜었다"고 적었다.

『사랑하는 것은 기다리는 것이야』의 권두에는 다음과 같은 시가 실려 있다.

⁴ 김임순 원장에 관해서는 다음 동영상을 꼭 보길 바람. 「거제도 애광원 사람들이 가진 나눔의 밥상!」 [한국인의 밥상 KBS 20231026 방송]"(https://www.youtube.com/watch?v=o_zuyg1Z8ag).

⁵ 『아사히신문(후쿠오카)』 2010.5.14 조간.

⁶ 『모리사키 가즈에 컬렉션 - 정신사(精神史)의 여정 5 회귀(回歸)』 360 페이지(후지와라 서점, 2009.3). 또한 「연보」 同年 말미에 "무나카타 시민 유지(有志)에 의해 애광원과의 교류지원의 모임·애행회가 탄생. 이후 매년 5월에 원생들의 수학여행을 시내로 맞이하고 있다"고 기록되어 있다. 애행회에 대해서는 모리사키 가즈에 『이야깃거리의 바다』 172쪽(岩波書店, 2006.1)에도 기재되어 있다.

현해탄에 지는 석양을 / 당신과 함께 맞으며 / 세계인권선언 50 주년 기념 대담을
 무나카타시에서 / 당신과 함께 마치고 / 김임순씨 / 감사합니다 / 한국의 고아 천 명의
 어머니 / 당신과 함께 / 패전(敗戰) 전 몇 달간 / 금천에서 책상을 나란히 하고 / 식민지
 2 세인 나는 / 동해의 파도 치는 열도(列島)에서 다시 살아나 / 당신의 고향에 사죄하고
 싶어서 / 모국을 찾아 지하 갱도를 찾았습니다 / 바람의 편지 당신 / 동시대를 살아온
 당신 / 민족을 묻고 성을 묻고 미래를 물으면서 / 서로 아시아를 건너 / 오늘 밤 무나카타
 해인족(海人族)의 바닷가에 서서 / 석양의 끝은 유라시아 대륙 / 모래폭풍이 밤하늘을
 물들인다 / 당신과 나를 스쳐 지나간다 / 어두운 밤에 퍼지는 탈식민지 후의 피비린내 /
 지구의 갈증 / 당신과 듣는 생명의 모국을 찾는 소리 / 글로벌한 그 고아들의 발자국 소리⁷

모리사키에 관한 연구는 지금까지 주로 중장년기의 활동(지쿠호{筑豊} 탄전을 거점으로 한
 문화운동지 『서클무라』나 여성 교류지 『무명통신』 등)을 중심으로 전후(戰後) 사상이나
 페미니즘, 탈식민주의(post-colonialism)과 같은 문제 의식에서 논의되어 왔다.

물론, 후기 모리사키 사상의 중요한 주제가 '생명(의 재생)'이라는 점도 지적되고 있지만⁸,
 그것을 그녀의 '오랜 세월의 마음의 집'과 결부시킴과 동시에 노년기의 전개까지 시야에 두고 논한
 것은 필자가 보기에 찾아보기 힘들다. 본고에서는 그것을 논하는 것을 과제로 삼고자 한다.

2. 70 세의 인터뷰에서

모리사키의 '오랜 세월의 마음의 집'은 무엇일까. 갓 70 세를 맞이한 인터뷰 기사를 통해
 확인해보자.

저는 '식민지 2 세'였습니다. 전쟁이 끝났을 때 나는 열 여덟 살이었습니다. 나를 만들어준
 '고향'은 내 것이 아니라는 것을 알았어요. '고향'을 그리워하며 몸부림치는 '전후(戰後)'였습니다.
 일흔이 된 지금, 비로소 무언가를 말할 수 있을 것 같습니다. [...] ⁹

⁷ 『사랑하는 것은 기다리는 것이야 - 21 세기를 향한 메시지』 9~10 쪽(후지와라 서점, 1999.10). 이 시는
 후에 「생명의 모국을 찾는 소리」라는 제목으로 시집 『피리 하나』(思潮社, 2004.10)에 수록되어 있다.

⁸ 사카구치 히로시(坂口博) 「처음에 '생명'이 있다」(『현대사상 11 월 임시 중간호 총특집 모리사키
 가즈에』靑土社, 2022.10, 55 쪽. 오히비나타 기미오(大日方公男) 「모리사키 가즈에를 읽기 위한
 전저작(全著作) 북 가이드」(모리사키 가즈에 『산 강 바다 별책 생명의 자연』아트 앤 크래프트, 2014.2,
 186쪽). 또한 사카구치는 모리사키 사상의 시대 구분을 초기(1975년=48세까지)·중기(1993년=66세까지)
 ·후기(1994년=67세 이후)로 하고 있다.

또한 모리사키의 '생명' 사상을 논한 것으로는 다카즈카 루리(高塚ルリ) 「모리사키 가즈에 연구 -
 생명과 에로스」(『동아시아 일본어교육·일본문화연구』7, 2004.3), 고바야시 미즈노(小林瑞乃) 「戰後
 사상사에서 모리사키 가즈에 - <대관념> 과 <생명> 의 언설을 둘러싸고」(『연보·일본현대사』18,
 2013.5), 가타오카 류(片岡龍) 「모리사키 가즈에의 '생명의 원향'에서 '토착적 근대' 개념을
 재검토한다」(『토착적 근대연구』2, 2024.3 출간 예정)등이 있다.

⁹ 「고향 상실, 조선에 대한 그리움에 찢긴 마음 (모리사키 가즈에의 세계 : 이야기하다)」(인터뷰·구성:
 가와야 후지오), 『아사히신문』1997.4.21 석간.

즉, '오랜 세월의 마음의 집'이란 '식민지 2세'로서 자신을 키워준 '고향'이 타민족의 것이라는 무자각에 대한 죄의식과 잃어버린 '고향'을 갈구하는 고뇌이다.

인터뷰는 다음과 같이 이어진다.

많이 살았네요, 칠십이네요. 몸이 변변치 못해서 젊었을 무렵부터 앞으로 3년만 더 살자, 앞으로 3년만 더 살자고 바랐어요. 3년만 더 살면 아이가 몇 살이 되니까. 하루를 보내기에도 힘겨웠어요. 그러다 보니 어느새 지금. 언제나 이렇습니다. / [...] 삼십 대, 사십 대는 정신과 치료를 받기도 하고요. [...] 때로는 길가에 쪼그리고 앉아서 살아왔어요. [...] 하지만 최근 몇 년은 거의 나아졌어요. 병원과 인연을 끊을 수는 없지만, 뭔가 꺼림직하던 것이 싹 가셨나봐요. 조선에서 태어난 것도 이제야 죄책감에서 벗어날 수 있을 것 같아요.

70세가 되니 무엇이 '싹 가신' 것일까. '죄책감에서 벗어나', 무엇을 생각하려 했던 것일까. 하지만 그 전에 모리사키의 '오랜 세월의 마음의 집'의 궤적을 좀 더 주의 깊게 살펴보고자 한다.

'젊은 시절'부터 몸이 약했다는 것은 광복 직전(1945년 6월 19일 후쿠오카시 공습) 무렵부터의 컨디션 불량(폐침윤¹⁰)과 그로 인한 요양소 생활(1947~49년)을 가리킨다.

요양소에 들어간 이듬해 8월에 대한민국이, 9월에 조선민주주의인민공화국이 성립. 퇴소 이듬해(1950년=23세) 6월 25일, 한국전쟁이 시작된다. 며칠 후, 모리사키는 귀환 후 살던 거리의 판잣집 옆 다리를 건너려던 중 갑자기 극심한 통증이 찾아왔다고 한다. 모리사키는 『사랑하는 것은 기다리는 것이야』에서 다음과 같이 적고 있다.

[...] 어느 거리를 나는 걷고 있었다. 전쟁의 불길이 떠오르며 시공간을 초월한 기도와 같은 생각이 시로 옮겨가는 것을 느꼈다. 그러자 갑자기 신음소리가 날 정도의 극심한 통증이 온몸을 휘감았다. 나는 다리 위에 서서 치통이 사라지기를 기다리듯 가만히 참았다. [...] 무슨 통증인지 설명할 수 없었다. 태어나고 자란 것에 대한 불 같은 질책이 온몸을 관통해 땅속으로 사라지는 것 같았다. [...] 이후 마음이 어제에서 내일로, 개인적 체험을 품고 더 크게, 민족의 움직임을 묻는 듯이 시(時)로 옮길 때면 종종 한순간의 극심한 통증이 찾아왔다.¹¹

'태어나고 자란 것에 대한 불 같은 질책'과 표현(시 창작) 의욕의 충돌이 모리사키의 컨디션 난조와 관련이 있는 것은 분명해 보인다. 모리사키에게 '표현'이란 '마음을 일구는 것'¹², 즉 자신을 다시 태어나게 하는 행위이며, 또한 '시'란 '삶이나 동생의 죽음을 넘어 이윽고 모두의 '내일'을 열기 위한 '자연과 사람들과의 대화'¹³이기 때문이다.

¹⁰ 모리사키 가즈에·나카지마 다케시(中島岳志) 『일본단층론』 64쪽(NHK 출판, 2011.4).

¹¹ 앞의 책, 『사랑하는 것은 기다리는 것이야』 17~18쪽.

¹² 모리사키 가즈에, 『지구의 기도』 137쪽, 149쪽(심야총서사, 1998.5).

¹³ 모리사키 가즈에 「생명의 내일을 향해 인터뷰」(『모리사키 가즈에 시집』 141~142쪽,思潮社, 2015. 첫 출간은 『춘추』 2009년 10월호).

'식민지 2 세'로서의 죄의식과 괴로움은 당연히 모리사키 개인만의 것이 아니다¹⁴. 1953 년(=26 세)에 동생 켄이치(健一)가 자살했다. 인터뷰에서는 다음과 같이 언급되어 있다.

동생이 자살해 버렸어요. 돌이킬 수 없는 후회예요. [...] '고향이 없다'고 그는 나에게 유서를 남겼어요. 고향이란 살아갈 수 있는 정신의 원천이잖아요? 사상 이전에 풍토와 역사와 나와 타자가 뒤섞인 혼돈이잖아요? 그것 없이는 사람은 살 수 없잖아요.¹⁵

이러한 '삶의 정신의 원천'인 '카오스'로서의 '고향'을 그들은 잃어버린 것이다.

그런데 앞의 인용문에서 '30,40 대는 정신과 치료를 받았다'고 한 것은 1961 년(=34 세)에 일어난 사건이 그 원인이 되고 있다. '연보'를 통해 그 경위를 추적해 보고자 한다.

사건 3년 전인 1958 년(=31 세), 모리사키는 온가군 나카마초(遠賀郡 中間町) 現 나카마시(中間市)에서 탄광회사 의사의 옛 집과 진료소를 빌려 살고 있던 타니가와 간(谷川雁)과 동거했다. 우에노 에이신(上野英信)·하루코(晴子) 부부와 공동생활을 하면서 『서클무라』을 창간. 안보 투쟁이 고조되는 가운데 이 잡지는 1960 년 5 월에 중단되었다. 타니가와는 서클무라 회원을 조직하고 다이쇼 행동대로서 다이쇼 탄광의 미지급 임금 투쟁에 참여했다. 사건은 그 이듬해에 일어났다.

"5 월, 다이쇼 행동대의 여동생이자 『무명통신』 [1959 년 창간]의 등사판(謄寫版) 인쇄를 돕던 젊은 여성이 심야에 탄광촌 주택에서 침입당해 살해당하다. 7 월, 『무명통신』 폐간. 12 월 강간범 체포. 다이쇼 행동대원이었다. 죽은 여성의 오빠가 우리 셋집 앞을 달리는 카츠키(香月) 선에 투신, 기립불능 상태가 된다. 이후 지역 탄광에서 일하는 사람들의 인간성에 의지하면서 조선 체험을 객관화할 수 있는 마음의 여유를 회복해 나갈 때까지 긴 시간을 보내게 된다."¹⁶ . 인터뷰에서는 "가까운 곳에서 강간으로 사망자가 나온 이후, 자신의 사상성의 일천함에 직면했다. 정치 우선의 흐름에 대해 성이나 생명과 같은 내용을 이야기할 방법도, 장소도 만들지 못했다"¹⁷ 라고 말하며 다음과 같이 회상하고 있다.

나는 모두를 부르자고 했다. 강간에 대해 이야기하자고 했다. 어떻게든 사상적으로 극복할 수 있을지도 모른다. "네 마음은 알겠다." 그[타니가와 간(谷川雁)]가 말했다. "하지만 지금은 좋지 않아."라고. 탄광 노동자들을 조직하는 마지막 투쟁이 고비에 이르렀을 때라 나도 어쩔 수 없다고 생각하고 미루고 미루었다. 그랬더니 …… 에로스가 나오지 않게 되어버렸다. [...] 몸이 현실에 타협하는 마음을 용납할 수 없다. 방황했습니다. 목마름과 굶주림에 이끌려 북으로 남으로 꽤나 걸었습니다.¹⁸

¹⁴ 모리사키의 초등학교 동급생 몇 명도 일본에 돌아온 후 자살했다고 한다(모리사키 카즈에, 『어른의 동화·죽음의 이야기』 200 쪽, 고분도, 1989.1).

¹⁵ 「죽음의 형태 '고향이 없는' 동생은 죽었다(모리사키 가즈에의 세계: 2 이야기하다)」(인터뷰·구성: 가와타니 후미오{河谷史夫}), 『아사히신문』 1997.4.22 석간.

¹⁶ 上記 「연보」 351 쪽.

¹⁷ 「시의 벗 지쿠호(筑豊)에 '좋은 일본인'이 있었다(모리사키 가즈에의 세계: 3 이야기하다)」(인터뷰·구성: 가와타니 후미오{河谷史夫}), 『아사히신문』 1997.4.23 석간.

¹⁸ 「생명의 바람 반복되는 출발, 그것이 인간(모리사키 가즈에의 세계: 4 이야기하다)」(인터뷰·구성:

인터뷰 말미에 모리사키는 자신이 지금까지 세 번 패배했다고 말했다. 첫 번째는 식민주의에, 두 번째는 에너지 정책에, 세 번째는 고도경제성장에 의한 번영에¹⁹. 이번 사건이 두 번째 패배에 해당한다. 즉, 석탄에서 석유로의 에너지 정책 전환이라는 '정치'를 젊은 동료의 성(性)과 생명을 무조건적으로 받아들이는 '에로스'(='생명의 에너지'²⁰)에 우선순위를 부여해 버린 것이다.

그리고 세 번째는 지구 환경(자연, 생명)의 파괴이며, 그것은 현재 점점 더 심각해지고 있다. 그럼에도 불구하고 모리사키는 인터뷰의 답변을 다음과 같이 마무리했다.

인간은 반복적으로 출발하는 존재라고 생각합니다. 듀라스²¹도 말했듯이, 매일 죽고 매일 다시 태어나서 살아간다. 나는 나 자신을 다시 살고 싶다. 다시 살기에 너무 늦었다는 법은 없다. 죽는 순간까지 다시 살고 싶다. [여학교 학급 모임에서 매년 2박3일 여행을 떠난다. '역시 외지에서 자란 사람은 강하구나'라고 말하죠(웃음). 다들 예순이 넘은 나이에 발랄한 표정이에요.²²

3. '반복해서 출발하는' 생명

모리사키가 '인간은 반복해서 출발한다'는 사상을 정리한 것은 68 세 때 출간한 『생명의 민낯』에서이다.

나는 사람은 반복적으로 출발한다고 생각하며, 지금 또다시 새로운 출발을 시작했다는 것을 의식하고 있다. /그러나 그렇지 않고, 사람들은 항상 반복한다고 느끼는 사람들도 적지 않다고 생각한다. 열 일곱 살부터 일본에서 살게 된 내가 느낀 것은, 일본인의 생활 감각은 일체로, 반복하고 회귀하는 것으로서의 생명의 전체상을 지속하고 있는 것 같다는 것이었다.²³

일본적인 '반복하고 회귀하는 것으로서의 삶'이 아니라 '반복해서 출발한다'는 생명 감각은 어쩌면 모리사키가 조선에서 태어나고 자란²⁴ 것과 관련이 있다²⁵. 56 세 때의 『경주는 어머니가 부르는 소리 - 나의 고향』에서 모리사키는 자신의 원형은 조선에 의해 만들어졌다고 말한다.

가와타니 후미오(河谷史夫), 『아사히신문』 1997. 4. 24 자 석간.

¹⁹ 앞의 책, 「생명의 바람 반복되는 출발, 그것이 인간 (모리사키 가즈에의 세계: 4 이야기하다)」.

²⁰ '에로스'에 대해 모리사키는 "타인을 무조건적으로 받아들인다. 먼저 받아들인다. 생명을. 그것을 에로스라고 해보기도 하고, 생명 에너지라고 불러보기도 하고, 여러 가지를 시도해 보지만, 좀처럼 쉽지 않아요. 뭐라고 해야 할까? 에로스, 역시 그렇게 말할 수밖에 없다"고 설명하고 있다(앞의 책, 「생명의 바람 반복되는 출발, 그것이 인간 (모리사키 가즈에의 세계: 4 이야기하다)」.

²¹ 마그리트 뒤라스(1914~96). 모리사키는 뒤라스의 원작을 바탕으로 몇 편의 라디오 드라마 대본을 썼다. 「모데라토 칸타빌레」(문예극장, 도쿄, 1971년 1월 24일, 재방송 1월 31일), 「라·무지카」(문예극장, NHK 도쿄, 1972년 5월 12일), 「이것으로 끝이다」(NHK 도쿄/FM 1996년 12월 12일).

²² 앞의 책, 「생명의 바람 반복되는 출발, 그것이 인간 (모리사키 가즈에의 세계: 4 이야기하다)」.

²³ 모리사키 가즈에, 『생명의 얼굴』 46쪽(이와나미서점, 1994 .9).

²⁴ 대구(~10세), 경주(11세~), 김천(16세).

²⁵ 이 점에 대해서는 앞서 필자의 글에서도 논하였다.

나의 원형은 조선에 의해 만들어졌다. 조선의 마음, 조선의 풍물 풍습, 조선의 자연에 의해. 내가 철이 들었을 때, 길에 자갈이 널브러져 있듯이 조선인의 생활이 한 면에 있었다. [...] / 어머니의 삶을 모르고, 어머니의 말을 모르고, 어머니의 향기를 알고, 어머니의 촉감을 알고, 어머니에게 업혀서는 머리카락에 입술을 묻고, 군고구마를 사주시고, 잠을 재워주셨다. 옛날이야기를 들려주셨다. 나의 기본적인 미적 감각을, 나는 나의 어머니와 수많은 무명의 사람들로 부터 받았다.²⁶

또한 인터뷰 이듬해 『생명, 울려 퍼지다』에서는 다음과 같이 말했다.

나는 태어날 때부터 이 땅의 풍토에 길러졌다. 마음껏 호흡했다. 사랑했다. 나에게 삶과 죽음에 대한 인간적인 사랑을 가르쳐준 것은 그 반도의 하늘과 공기다. 그 안의 생명체들의 모습이다. 나는 인간도 새나 풀과 나무처럼 다양하게 공생하는 존재라고 믿으며 어린 시절을 보냈다. 정치적 침략민족이라는 자각도 없이. / 그 죄스러움. 내가 마음에 끌렸던 조선의 노인과 청년과 소년. 나에게 무언의 눈빛을 쏟아 부었던 그들. 그 침묵의 사랑. 그것은 민족문화를 파괴하는 강자의 논리에 대한 비판을 감싸안으면서도 더 깊이, 생물로서의 나에게 닿았다.²⁷

여기서 '삶과 죽음에 대한 인간적인 사랑', '침묵의 사랑'이라 불리는 것은 바로 앞서 살펴본 '에로스'일 것이다. 에로스에 의해 새로운 생명이 탄생한다. 그것이 바로 새로운 '출발'인 것이다. 모리사키는 에로스를 '사회적 부성, 사회적 모성'이라고도 부른다²⁸. 74 세 때 쓴 『생명의 모국 찾기』에서,

사회적 모성, 부성이란 내자식을 낳고 기르는 사적이고 개인적인 성으로 개개인의 생명

²⁶ 모리사키 가즈에 『경주는 어머니가 부르는 소리』 치쿠마문고판, 17~19 쪽 筑摩書房, (1991.9). 동서(同書)의 단행본은 1984년 3월 간행.

²⁷ 모리사키 가즈에 『생명, 울림』 121 쪽(藤原書店, 1998.4).

²⁸ "우리는 시공간을 초월해 살아가는 생명을 상상합니다. 식물과 동물을 포함한 미래의 숲을. 생명을 키우고 싶은 것입니다. 이런 마음의 작용을 저는 사회적 부성(父性), 사회적 모성(母性)이라고 부르고 있습니다." (모리사키 가즈에, 『생명을 낳다』 193~194 쪽, 弘文堂, 1994.2). "요즘 절실하게 생각하는 것은 부모의 마음이란 혈연에 대한 이기주의가 아니라는 것이다. 다음 세대에 대한 열린 마음이라고 해야 할까, 우선 나는 사회적 부성, 사회적 모성이라고 부르기도 하고, 사회적 친심(親心)이라고 중얼거리기도 한다. 새가 새끼에게 먹이를 나르듯 굶주리지 않게 하는 일." (『親心: 나의 졸업 모리사키 가즈에 (잠깐 심호흡)』, 『아사히신문(西部)』 2000.2.20 조간). "나는 자식이 있든 없든, 사회적 활동의 장(場)에서야말로 미래의 생명에 대한 사회적 부성과 사회적 모성이란 무엇인가를 자문하면서 생산 체제를 정비해 주었으면 좋겠다는 것을 통감합니다. [...] [어린 시절을 도시에서 보내더라도 그 창의력을 방해하지 않는 아이의 시공간이 흙과 물과 작은 생명체들의 풀밭과 함께 하는 그런 문명을 키워주고 싶다." (『생명에게 보내는 편지』 37 쪽, お茶の水書房, 2000.8). "그것[=사회적 부성·사회적 모성]은 복지 행정이 아니다. 남녀평등 사회도 아니다. 더구나 양성(兩性)을 생식 기능에 한정된 호칭이 아닙니다. 모성이나 부성, 그것은 생명의 연속성에 관한 인간적인 관점, 사색, 노동입니다." (모리사키 가즈에 『낳선 나 - 노년에 만나는 생명』 98 쪽, 東方出版, 2001.4).

계승을 막는 것이 아니라, 일터 등 온갖 생산 현장의 모습도 생명 계승의 방향으로 작용하는 인간적 에너지다. 나는 요즘 그것을 '에로스'라고 말하곤 한다. 생명에 대한 사랑은 '에로스', 섹스가 아니다. 에로스는 더 깊은 것이다. 팔십 할머니에게도 에로스는 있다. 자아실현이라는 것은 '다른 생명을 받아들이는 힘'을 말하는 거야 [...] .²⁹

이러한 생명에 대한 사랑(에로스)을 모리사키는 조선의 풍물, 풍토 속에서 길러낸 것이다.

나는 어릴 적부터 연필과 크레파스를 장난감으로 삼아 혼자 놀았다. 그리고 언제부턴가 마음과 몸에 울려 퍼지는 자연과 사람, 생명체와의 공명이라고도 할 수 있는 세계를 느꼈던 것 같습니다. 그것은 옛 조선에서 태어나고 자란 제가, 말이 다른 사람들 - 조선, 중국, 러시아, 유럽 사람들도 있었습니다 - 어른들까지도. 작고 작게 생각하게 할 만큼의 아름다움과 넓이로, 아침과 저녁의 하늘이 색조를 바꾸는 것에 감동하며 눈물을 흘렸던 것과 관련이 있는 것 같습니다. 초등학교 입학 전후부터 종종 그런 경험을 반복했습니다. / 그 자연과 생명과의 교향곡에 대한 사랑을 키워준 것이 '일제시대'의 대지였다는 것, 또한 그 대지에 울려 퍼지던 노래와 리듬이었다는 것이 힘들어서 몇 번이고 무너져 내렸어요.³⁰

'자연과 생명과의 교향곡에 대한 사랑'을 키워준 '고향'이 타민족의 풍토, 풍물이었다는 것을 자각하지 못한 '나'란 무엇인가? 타민족의 땅을 침략한 일본 민족이 만들어낸 '국가'란 무엇인가? "문화와 민족, 성 등 자신과 이질적인 타자를 받아들이고"³¹, 서로를 살릴 수 있는 '나', 그리고 '국가'는 어디에 있는가. 68 세(『생명의 민낯』)의 모리사키는 다음과 같이 탄식하고 있다.

패배는 나라의 개체의 정체성을 알려준 것이었다. 개인의 조건으로서의 일본인. 일본인이라는 민족. 그 민족이 만들고 있던 국가. 나는 나의 조건으로서의 민족의 역사와 원죄에 짓눌리면서, 그러나 그 민족성과 내가 마음속에 그리는 민족과는 달랐다고 외치고 싶은 심정이었다. / 그러나 여기서부터 출발할 수밖에 없다. / 내 생존은 잘못되었다는, 태어난 것에 대한 죄의식이 온몸을 짓누른다. 선택의 여지없이 나는 부정되어야 할 존재였던 것이다. 조선민족으로부터. 그 역사로부터. 그 풍토에서. / 그 풍토에 의해 길러진 생명. 감성. 사고방식. 언어의 뉘앙스. 그 덩어리인 나. / 나는 어디를 향해, 어떻게 살면 좋을까. 어떻게 살아야 할까.³²

'사람은 반복해서 출발한다'고 말한 모리사키의 다시 사는 '여행'은 바로 여기서부터 비롯된 것이다.

4. 한일 양국에 불어오는 해풍

²⁹ 모리사키 가즈에 『생명의 모국 찾기』 233~235 쪽(風濤社, 2001.9).

³⁰ 앞의 책, 『지구의 기도』 168~169 쪽.

³¹ 앞의 책, 『생명의 모국 찾기』 195 쪽.

³² 앞의 책, 『생명의 민낯』 49~50 쪽.

모리사키의 '북으로 남으로' 다시 사는 '여정'을 자세히 더듬을 지면의 여유가 본고에는 없다. 여기서는 앞서 인용한 『사랑하는 것은 기다리는 것이야』의 서두의 시에 "식민지 2세인 나는 / 동해의 파도치는 열도에서 다시 살면서 / 당신의 고향에 사죄하고 싶어서 / 조국을 찾아 지하갱도를 찾아 / 바람의 편지의 당신 / 동시대를 살아온 당신 / 민족을 묻고 성을 묻고 미래를 묻고 / 서로 아시아를 건너/ [...] 당신과 함께 듣는 생명의 모국을 찾는 소리 [...] "라고 했듯이 '생명의 모국'을 찾는 여행에는 당연히 한국으로의 여정도 포함된다는 점에 주목해두고자 한다.

모리사키가 광복 후 처음으로 한국에 온 것은 1968년(=41세)이었다. 경주중고교 창립 30주년 기념행사에 초대받은 모리사키가 돌아가신 아버지를 대신해 축하연에 참석하고 아버지의 제자들을 만난 이 여행에 대해서는 『경주는 어머니가 부르는 소리』의 여장(余章)에 기록되어 있으니 자세한 내용은 그 책에 양보하고자 한다.

『경주는 어머니가 부르는 소리』을 출간한 1984년(=57세)에 모리사키는 규슈대학 문학부 유학생이자 식민지 시기 금천고등여학교 후배인 채경희(『가라유키 씨』의 한국어 번역자)를 만난다. 이듬해 1월, 미국에 거주하는 금천 출신으로 모리사키의 아버지를 알고 있는 한국인으로부터 갑자기 편지가 도착한다. 이러한 우연이 이 해(1985년)의 한국 재방문, 그리고 김임순과의 재회로 이어지는데, 그 자세한 내용은 『메아리 울려 퍼지다 산천 속으로 - 한국기행』(아사히신문사, 1986.7)에 정리되어 있다. 여기서는 '연보'를 바탕으로 간단히 살펴보자.

지난 1월, 미국 국회도서관 동양서관(東洋書館) 송승규 관장으로부터 『경주는 어머니가 부르는 소리』를 읽으며 금천중학교 당시 교장의 딸임을 알게 되었다는 소식과 동양서관의 모리사키 가즈에 도서목록을 받았다. 그의 아버지 송창근 박사는 한국신학대학교 총장으로, 한국전쟁 때 납북되어 생사불명이다. 3월 채경희의 귀국에 동행하여 한국으로 왔다. 서울에서 옛 친구 김임순과 연락이 닿는다. [...] 서울에서 돌아오는 길에 거제도까지 가서 애광원을 방문. 김임순의 남편은 한국전쟁에서 생이별한 송승규[=미국 국회도서관 동양서관 관장]였다.³³

그 후 모리사키는 '반복적인 한국 여행'을 거듭하며 '김임순 씨와 일본 각지를 함께 걸었'다³⁴. 이러한 교류가 쌓여 마침내 앞서 본 1998년(=71세)의 무나카타시(宗像市)·후쿠오카시(福岡市)에서의 김임순과의 대담, 그리고 2000년부터의 애광원 수학여행을 통한 시민교류로 결실을 맺게 된다. 78세 때의 『이야깃거리의 바다』에서 모리사키는 "애광원과의 교류가 내 개인을 넘어섰다"고 말하며, 김임순에게 다음과 같이 이야기하고 있다.

³³ 앞의 책, 「연보」 136 쪽. 송승규씨는 윤동주(1917~1945)와 함께 교토에서 체포되어 후쿠오카 형무소에서 옥사한 송몽규(1917~1945)의 사촌이며, 또한 윤동주는 송몽규의 사촌이다(모리사키 가즈에 『생명으로의 여행 - 한국·오키나와·무나카타(宗像)-』 171 쪽, 岩波書店, 2004.1). 아버지 송창근(1898~1950?) 박사의 전기, 논설문, 일화, 추모문은 만우 송창근 선생 기념사업회 『만우 송창근』(선경도서출판사, 1978.4)에 정리되어 있다. 송창근이 1922년에 일본에 와서 동양대학에 입학한 것은 야나기 무네요시(柳宗悦, 1889~1961)를 만나기 위해서였다고 한다(『만우 송창근』 29~30 쪽).

³⁴ 「도시락 : 1 어린이 천국 모리사키 가즈에(잠깐 심호흡), 『아사히신문(西部)』 2002.9.29 조간).

당신 덕분에 몸 안의 열음이 녹았어요, 고마워요. [...] 나는 어렸을 때 포플러 나무를 껴안았을 때 수액이 흐르는 소리를 들었어요. 그 생명의 소리. 나도 물이 되어 바다로 흘러가고 싶어. 이 해협, 이 바닷물로. [...]

'몸 안의 열음'이 '오랜 세월의 마음의 짐'이고, 포플러의 '수액 흐르는 소리'가 모리사키의 어린 영혼을 키운 생명에 대한 사랑(에로스)임은 말할 필요도 없을 것이다³⁶. 그러나 2005년 3월 시마네 현(島根縣) 의회가 '다케시마(竹島)의 날' 조례를 제정하면서 그 해 애광원 수학여행은 중단될 수밖에 없었다.

하지만 모리사키는 반대로 이를 계기로 하여 "구체적으로 교류의 폭을 다음 세대에서 손자 세대로 연결시키는 역할을 했다"며 "독도 문제로 만날 수 없는 동해, 그 동해를 넘어, '사랑하는 것은 기다리는 것이야'³⁷를 젊은 세대에게 당신의 목소리와 말로 이야기해 달라"며 무나카타시에 있는 후쿠오카교육대학에서 강연을 의뢰해 실현시킨다³⁸.

모리사키는 이렇게 적고 있다.

나는 17세의 마지막 몇 개월을 김천여고에서 김임순 씨와 책상을 나란히 했다. 그 십대의 만남도, 내 목숨의 끈으로 되어 있다. 독도가 있다해도, 십대의 만남도, 꿈도, 지구를 둘러싼다. 언젠가는 애광원의 바다로 향한 언덕의 작은 길이나 밭이나 작업소에서 한 알이 쏟아질지도 모른다. 풀도 싹을 틔운다. 뿌리를 뻗친다. 누군가의 마음의 밭에도.³⁹

70세의 인터뷰에서 "다시 살아가기에 너무 늦었다는 법은 없다. 죽는 순간까지 다시 살고 싶다"고 서술한 모리사키의 재기 행보는 "바다에 살던 사람들의 고대부터 내려오는 생명관, 자연관에 의해 길러지면서" 마침내 "여기까지 올 수 있었다"는 것이다⁴⁰.

³⁵ 앞의 책, 『이야기거리의 바다』 172~173 쪽.

³⁶ "내가 태어난 곳은 현해탄 저편. 한때 일본이 식민지로서 삼은 타국이다. / 그 인간세계 속에서 나의 어린 영혼을 무조건적으로 받아준 것. 그 기억이 떠오른다. 그 기억이 되살아난다. / [...] 어느 해질녘, 아버지와 함께 산책을 했다. 초등학교 입학 전 아이에게는 하늘을 찌를 듯이 큰 포플러 나무가 몇 그루 늘어서 있었다. 그 큰 나무를 껴안고 눈을 감으면 수액 흐르는 소리가 들렸다. 하늘의 물이라고 생각했다. 눈을 뜨고 위를 올려다보니 큰 나무의 가지, 그 안에서 수천 마리의 참새가 울고 있었다. 참새와 나 사이로 천수가 흐르고 있었다." (앞의 책 『생명에게 보내는 편지』 26 쪽). 또한 앞의 책 『낮선 나』 27~29 쪽 참조.

³⁷ "사랑하는 것은 기다리는 것이야"의 책 제목은 이 책에 실린 김임순 자신의 말, "나는요. 가르쳐야 해요, 그 아이들에게. [...] 키운다는 것을 가르칠 수 있어요. 사랑한다는 것을. / 시간이 걸려요. 무엇이든 그렇겠지만. 어떤 인간이라도 '아, 이것이 그 사람의 힘이다'라는 능력이 숨겨져 있어요. 그것어요. 천천히, 키운다. 사랑하는 것. 기다리는 것. 10년 15년. 평생 기다릴 수 없다는 것은 없어요, 난" (208~209 쪽)에서 발췌한 것이다.

³⁸ 앞의 책, 『이야기거리의 바다』 179~186 페이지. 또한 애광원 수학여행은 이듬해인 2006년에 무사히 재개, '후쿠오카교육대학 사회복지학과와 평생교육학과의 교수와 학생들, 그리고 시내 복지시설 관계자들과 함께 교류회를 즐겼다'(앞의 책 「연보」 362 쪽).

³⁹ 앞의 책, 『이야기 바다』 184 쪽.

⁴⁰ 「고향 : 1 고마워요, 모리사키 가즈에(잠깐 심호흡)」, 『아사히신문(西部)』 2005.2.20 조간. '바다에 사는 사람들'이란, 여기서는 '무나카타의 풍토'에 둘러싸인 '무나카타 자유대학'(1988~2003년)과 '무나카타 시민대학·유메오리(夢織)(2003~2009년. 모리사키가 학장을 역임)의 자원봉사 시민을 가리킨다.

80 세 때 발표한 '해풍(海風)'이라는 시를 예로 들어보자.

그 날 조용한 한낮 / 한일 풀뿌리 교류의 작은 소포를 들고 / 우체국으로 평소의 언덕을
오르고 있었다 // 사람도 차도 식사시간 / 오가는 소리도 끊어졌다 / 갑자기 언덕길
한가운데서 / 가우똥거리며 / 오른쪽 무릎 // 앗!…… / 움직임이 멈춘다 / 흔들리는 몸 /
반사적으로 한쪽 다리를 엉겨주춤하며 / 아파! // 1초 2초, 제대로 하자 / 5초 6초, 참아라
/ 자신을 꾸짖는 고령기(高齡期) / 그 한낮부터 삼 년이 지나 / 무너져가는 몸속 자연을
보듬어가며 / 교류회를 준비한다 / 나는 식민지 2세 먼 과거의 유년기 / 어린 시를 쓰고
있었다 / 아침 햇살에 물든 칠색 구름의 멋진 광경에 / 눈물 흘리면서 이야기를 찾은 그
대지 / 생가죽 벗겨내는 전후(戰後)의 세월 / 어머니들의 생명, 향기로운 바닷바람에 몸을
맡기며 / 일본어랑? / 생명이란? / 언젠가 원죄의 땅에 설 수 있는 나에게 / 다시 살고 싶다고
/ 열도의 북으로 남으로 / 전후(戰後) 60년을 지나 드디어 / 다음 세대, 손자 세대와 함께
교류의 바다를 건너 / 지구온난화가 가속화되는 21 세기의 문명 / 먼지는 바다에
흩어지더라도 / 태양이 떠오르는 동해, 그 동해 / 둥근 지구여 / 둥근 지구여 우주의 별이여
/ 내일 태어날 그대 들이여 / 이질적인 문화를 서로 교류하면서 / 미래를 향해 나도 꿈을
짜낸다 ⁴¹

'무너져가는 몸속의 자연'을 느끼면서도 다음 세대, 손자 세대와 함께 하는 한일 풀뿌리 '교류의 바다'에 '생명의 향기로운 바닷바람'이 불기 시작한 것이다.

5. '좋은 아침! 오늘의 나'

언제부터 인가 모리사키는 아침에 일어나면 스스로에게 인사를 하게 되었다고 한다.

68 세 때 쓴 『생명의 민낯』에서 "사람은 반복해서 출발한다"고 말한 후, "우리 몸의 세포가 신진대사를 하면서 어제의 삶에서 오늘의 삶으로 변모하는 것"과 같이 "나는 매일 아침 갓 태어난 나에게 인사한다"고 적고 있다⁴².

긴 인용문이 이어지는데, 70 대 초반의 글을 몇 가지 살펴보자.

나는 조선에서 태어나고 자란 자신과 그 시대의 다른 민족과의 공통된 경험이 괴로웠고, 귀환 후의 삶을 살면서 생애에 걸쳐 이 일본에서 나 자신을 다시 태어나게 하고 싶다고 바라왔습니다. 그렇게 스스로에게 요구하면서, 그렇지만 금세 망설이는 마음을 '안돼 안돼'라고 꾸짖고 또 꾸짖고, 마침내 노년의 언덕에 다다른 것입니다. [...] 귀국 후

또한, 무나카타 해인족(海人族)의 '고대부터의 생명관·자연관'을 살피는 모리사키의 여정은 40 대부터 만년까지 이어져 왔지만, 본고에서는 상세히 설명할 여유가 없다. 또한 모리사키는 무나카타가 '일본 해녀의 발상지'이며 '그녀들은 '자신의 고향은 조선'이라고 입을 모은다'고 말하고 있다 (『권두 인터뷰 모리사키 가즈에 : 생명의 소리를 담는 여행』, 『산 강 바다 : 자연과 살다, 자연에 살다: 자연민속지』 4 호, 아트 앤드 크래프트社, 2012.3).

⁴¹ 모리사키 가즈에 「해풍」(『가나가와대학평론』 57, 2007.7. 앞의 『산 강 바다 별책 생명의 자연』 수록).

⁴² 앞의 책, 『생명의 민낯』 45 쪽.

자신이란 무엇일까, 여자란? 민족이란? 등등을 생각하며 세월을 보내다가 어느 날 아침 문득 생각했어요. 낯선 나, 지금 태어난 내가 있다. 저림이 심해서 류마티스는 잠자는 동안 온몸을 느긋하게 걷고 있는 거겠죠. 몸은 뻣뻣한데 무언가가, 이리저리 헤엄치고, 활기차게 헤엄친다. / 카즈짱(가즈에 상) 좋은 아침이야. 나는 마음으로 말을 걸었다. 이제 막 태어났구나, 참 작구나. 물고기 같은 …… 모르는 나 …… / 오늘의 나, 좋은 아침! 인사를 했다. 아픈 몸을 일으킨다. 그리고 드디어 나는 깨달았다. 나에게 있어 납득할 수 있는 나를 만난다는 것이 어떤 것인지를. 그것은 태어난 그대로의 별거벗은 생명으로 되돌아가는 것. 그 별거벗은 생명계와 부딪히는 것에 눈을 뜨고, 어제의 나와 작별을 고하고 매일을 걷는다. "자, 일어나자! 오늘의 나에게로" 인 것이었습니다. / 나는 그런 나와 함께 걷는다. 오늘 하루 가능한 한 별거벗은 생명을 사회와 문명의 토대에 재구축할 수 있는 방법을 찾고 싶다. 직위 사회나 무력 문명이 아닌.⁴³

올해도 나는 낯선 나 자신을 문득 깨닫는 순간이 있기를 바라고 있어요. [···] 낯선 나를 느끼는 순간 따위, 그것은 단순히, 나이를 먹는 것일지도 모릅니다. [···] 지금, 세계는 모든 분야에 걸쳐 현대 문명의 재검토기에 접어들었어요. 과거는 참고할 수 없는 문명으로. 나도 그 중 한 명입니다. 내일이 있기를 바란다면, 다른 한 알 한 알을 살릴 수 있는 에너지를 스스로에게 불러내는 것 외에는 다른 방법이 없어요. 낯선 나를 만나고 싶어요. 내 몸과 마음의 생명에 대한 사랑을 되살리고 싶어요. / 저는 어렸을 때부터 심신부진이 계속되고 있었어요. 그런 나에게 할 수 있는 것은 [···] 마음에 꿈을 그리는 것이었어요. 한편으로는 자신과 싸우는 것, 사회에 목소리를 내는 것이었습니다.⁴⁴

여기서 읽어낼 수 있는 것은 '낯선 나'와 만난다는 것은 단순히 늙음을 느끼는 것이 아니라 '태어난 그대로의 별거벗은 생명'을 자각하는 것, '다른 하나하나를 살리는 에너지(='나의 몸과 마음의 생명에 대한 사랑'), 즉 에로스를 스스로 불러일으키는 것'이며, 또한 그것은 모리사키에게 있어 '오늘 하루 가능한 한 별거벗은 생명을 사회와 문명의 토대에 재구축'함으로써 지금까지의 '직위 사회나 무력 문명'이 아닌 '과거는 참고가 되지 않는 문명'을 함께 만들어내려는 자신과의 싸움이었던다는 것이다.

다만, 그 싸움은 결코 슬프고 서운한 느낌이 감도는 것은 아니다. 71세 때 쓴 글에서 서로를 키우던 절친한 친구의 죽음, 젊은 친구의 아들의 죽음, 유아의 생사를 마주한 일 등에 대해 "자연은 깊숙이, 조용히 가만히 생명들을 품는다"고 말한 후 이렇게 말했다.

나도 불어오는 바람에 귀를 기울이며 나 자신과 함께하고 싶어. 항상, 즐겁게. 반복해서 태어난 그대로의 별거벗은 나로 돌아가고 싶어. / 아니, 태어난 별거벗은 몸은 이런 주름진 여자가 아니었어요. 그래서 어제의 나를 훌훌 털어버리고, 아침마다 항상

⁴³ 모리사키 가즈에 「태어난 그대로의 별거벗은 생명으로 돌아가다(자신과의 만남)」, 『아사히신문』 2000.9.25 석간(이후 앞의 책 『생명의 모국 찾기』에 수록). 그 외 『생명의 모국 찾기』 106쪽, 129쪽, 176~177쪽, 앞의 책 『낯선 나』 210쪽, 앞의 책 『생명으로의 여행』 223쪽 등도 참조.

⁴⁴ 앞의 책, 『생명의 모국 찾기』 6~7쪽.

인사를 해요. 이제 막 태어난 오늘의 나에게. / "좋은 아침! 오늘의 나" 라고. 자, 여행을 해보자. 목소리가 듣고 싶어. 저 사람 저 사람, 저 산 저 강 저 물과. 저 물과 함께 울려 퍼지고 싶어.⁴⁵

모리사키에게 매일 아침의 인사는 계속해서 어제의 자신을 버리기 위한 외침, 죽을 때까지 다시 살아가기 위한 스스로의 질책이라고 할 수 있지만, 동시에 그 싸움은 사람들과 자연과 교감하며 다시 태어나는 즐거운 '여정'인 것이다.

생명의 울림은 동시대 사람들과 자연 뿐 아니라 '자기 자신으로 이어져 온 생명계와 생명을 존속시키는 자연계'와의 공명(共鳴)이다⁴⁶ 73세의 『이방인인 나』에서는 이렇게 말하고 있다.

그리고 보니 언제부턴가 아침잠에서 깨어날 때쯤이면 '좋은아침! 나'를 외치게 되었다. 언제쯤 부터였을까. 세포의 신진대사가 나이와 함께 생명의 탄생과 그 재생과 겹치면서 마음에 와 닿는다. 지금 태어난 나, 태어나고 있는 내가 거듭 깨어난다. 분명 개체의 죽음이란 이런 것이겠구나라는 생각이 절로 든다. [...] 아득히 먼 생명체의 연속성과 개체. 그 자연계(自然界)의 시간, 공간 [...] . 죽는다는 것은 따뜻해지는 것이다.⁴⁷

죽음은 삶과 대립하는 차가운 것이 아니라, 매일매일 오래된 세포가 죽고 새로운 세포가 태어나듯, 삶과 연속성을 갖고자 하는 따스한 온기로 여겨진다⁴⁸.

또한 74 세 때 쓴 『생명의 모국 찾기』에서 죽음은 '삶의 한가운데에 자리 잡은 소중한 부드러움', 혹은 '삶에 대한 자각과 자립의 기반'이라고 말하며 다음과 같이 말했다.

우리는 개인의 죽음밖에 묻지 못한 채 오늘에 이르렀어요. 아니, 그것은 개인의 것이라기 보다는 자신의 것이라고 해야 할 거예요. [...] 그러나, 실은 개인의 죽음에 대한 두려움과

⁴⁵ 모리사키 가즈에 「죽음을 바라보며 자신과 마주하다」, 『요미우리신문(도쿄)』 1999.4.6 조간.

⁴⁶ "여행을 하면서 나는 스스로에게 묻습니다. / 자아실현이란 내 한 세대의 권리 주장이 아니겠지요 라고. 그것이 아니라, 자기 자신으로 이어져 온 생명계와 생명을 존속시키는 자연계가 내 몸과 마음에도 영향을 미치고 있다는 것을 제대로 받아들이고, 동시대 이성(異性)의 타자와 함께 미래로 메시지를 보내는 것이 아닐까 라고. / 그것을 나는 무엇이라고 불러야 할지, 아직 정하지 못했습니다. 어쩔 수 없이 사회적 모성, 사회적 부성을 키우고 싶다고 말하며, 그 에너지를 에로스라고 부르고 있습니다. 그리고 다음 세기를 향해 일세대주의를 넘어선 생명의 연속성 철학이 새로운 문명을 탄생시켜 주기를 바라고 있는 것입니다." (앞의 책 『생명으로 가는 길』) (앞의 『생명에게 보내는 편지』 40 쪽).

⁴⁷ 앞의 책 『낯선 나』 55~57 쪽. 또한 61 세 때의 글에서는 "개인은 사라져도 우리는 인간들이 또한 여전히 영원히 살아갈 것을 믿는 것입니다. [...] / 인간 무리의 생명의 따뜻함. 그것이 만약 자신의 죽음과 함께 지구상에서 전멸하는 것이라고 한다면, 우리는 종교조차도 만들어낼 힘을 갖지 못할 것이라고 생각합니다. [...] 설령 싱글 라이프를 고수하며 출산을 거부하고, 자식의 탄생을 바라면서 자식을 낳지 못하는 삶을 살더라도 인간이 인간인 한, 인간 일반은 생식연령이 되면 자식을 낳는다는 것을 기정사실로 알고 있었기 때문에, 인간들의 영생에 안겨 우리는 죽을 수 있었던 것입니다. [...] 한 사람 한 사람의 생애는 끝나도 사람들이 살아 있다는 것, 그것에 대한 신뢰가 개개인의 죽음을 얼마나 따뜻하게 감싸고 있는지 헤아릴 수 없다고 나는 생각합니다." (모앞의 책 『어른의 동화·죽음의 이야기』 173~174 쪽).

⁴⁸ "죽음은 삶을 다하는 것입니다. / 한 사람 한 사람의 생명을 불태우는 것입니다." (앞의 책 『어른의 동화·죽음의 이야기』 224 쪽).

불안을 덜어주는 것은 개인의 죽음 이후에도 여전히 생명으로 살아가고 있는 사람들의 생명이 있다는 것이 아닐까요? 인류의 생명 영속을 위한 기도야 말로 죽음을 바라보는 마음가짐이라고 나는 생각합니다.⁴⁹

'일세대주의'의 사생관을 넘어, 생명이 영속하는 세계('생명의 모국'을 향한 기도, 마음가짐. 그러나 모리사키는 그러한 세계가 보이는 것은 '60 대에는 무리'이며, '몸이 너털너털해지면서 비로소 보이는 것'이라고 말한다⁵⁰. 체력도 의식도 늙어 가지만, '그렇게 될 무렵에 활기차게 작동하는 것', '젊은 지혜가 간과했던 생명체의 응답'이 있다고 말한다⁵¹.

자신을 알라. 자신의 몸에 조용히 마음을 맑게 하라. [...] 늙어서 더욱, 아침의 내가 태어나고 있어. 아니, 아니 늙어가면서 살아야만 만나게 되는 나입니다. 그날 아침의 새로운 생명. 갓 태어난 새로운 생명. 좋은 아침의 나라고 인사하고, 오늘 아침의 나와 함께 가능한 영혼을 불태워보자.⁵²

"젊은이들이 개성 있는 삶을 추구하듯, 노인들도 개성 있는 나날을 추구한다"⁵³. 그러나 우리 문명에는 아직 "타자로서의 고령자를 만나고 있는, 그 날의 삶의 목소리가 들리지 않는다"⁵⁴. 지금까지의 '노인'의 개념을 대신할 '노년의 자연스러움에 대한 정확한 말과 글의 언어도, 아직 태어나지 않았다'⁵⁵.

그리고 모리사키에게 있어 나이 들어가면서 만나는 새로운 생명을 자각하고 그것을 '표현'하는 것은 개인의 사생관 확립을 위해서가 아니라, 함께 살아가고 서로 생명을 지탱하는 사회를 열어가기 위한, 자신을 다시 살리는 일이다⁵⁶.

이러한 '마음가짐'으로 현해탄을 사이에 둔 한일 풀뿌리 '교류의 바다'에 생명의 향기로운 바닷바람이 불기 시작했음은 두말할 나위도 없을 것이다.

6. 맺음말

70 대 후반에 접어들면서 모리사키는 날마다 미묘한 컨디션 변화에 시달리게 된다.

⁴⁹ 앞의 책 『생명의 모국 찾기』 205~208 쪽.

⁵⁰ 앞의 책, 『낮선 나』 198 쪽.

⁵¹ 앞의 책, 『낮선 나』 122 쪽.

⁵² 앞의 책, 『낮선 나』 210 쪽.

⁵³ 앞의 책, 『생명의 모국 찾기』 202 쪽.

⁵⁴ 앞의 책, 『낮선 나』 198 쪽.

⁵⁵ 앞의 책, 『생명의 모국 찾기』 190 쪽.

⁵⁶ "가정은 생명을 키운다든지, 쉬게 한다든지, 그 마지막을 보살핀다든지 하지만, 그것이 불가능한 만년도 적지 않습니다. 또한 일반적으로 고령자는 의사소통 기능을 상실하기 쉽습니다. 이러한 상태를 지원하기 위한 시설이 다양한 형태로 사회적으로 필요하지만, 동시에 우리도 직장이나 가정을 오가는 것 뿐인 삶에서 자립하여 도움을 필요로 하는 생명들의 버팀목이 되는 삶의 방식을 사회 참여의 일부분으로 익혀야 한다고 생각합니다." (앞의 책, 『생명의 모국 찾기』 204 쪽).

칠십대 중반을 넘어서면서부터 나는 아침마다 미묘한 몸 상태의 변화에 시달렸다. 그전처럼 '좋은 아침'이라고 스스로에게 인사할 때, 무심코 팔다리를 뺏는 것조차도 몸의 어딘가에서 경련이 일어난다. 젊을 무렵부터 수면이 부족하기 일쑤였지만 경련은 괴롭다.⁵⁷

그리고 신경외과 주치의로부터 받은 수면유도제로 겨우 5시간 안정을 취하는 등 '노년의 자연을 더듬는' 일상 속에서 '모태에서 자라는 생명처럼, 자연의 태내(胎內)에서 자라는 노년의 생명도 그 시공간에서 아침마다 태어나는 것'이라는 것을 최근에서야 알게 되었다고 한다.

그전까지는 '낯선 나'를 만나고 싶다 해도 어제의 나를 끌고 다니며 '오늘의 나와 좀처럼 함께 걸지 못하는' 경우가 많았지만⁵⁸, '칠십대 후반의 나에게는 매일매일 낯선 내가 나타나기 시작했다'⁵⁹.

그리고 80세가 된 모리사키는 젊은 친구 부부(규슈대학 대학원 인간환경학 연구소의 타카하시 쓰토무{高橋勤} 교수와 대마도 출신의 타카하시 미즈에{高橋三恵} 부부)에게 다음과 같은 엽서를 보내고 있다.

웬지 지금에 와서 이 바닷가, 아니 현해탄의 이미지가 미즈에 씨, 당신의 고향[=쓰시마]의 사람들과 함께한 생명의 바다로 되살아나고 있어요! 이제야 깨달았어요. 고마워요! 생명의 밑바닥에서 한 명의 귀향녀로 돌아가고 있습니다. 팬찮아, 지금 태어났어, 가즈에 씨, 1927년 4월 20일생인 나의 재생(再生)입니다.⁶⁰

그로부터 몇 년 후(2010년), 일본은 인류 미지의 '초고령 사회'에 돌입했다. 서두에 게시한 사진의 모리사키 가즈에 83세의 해이다.

만년의 모리사키는 치매에 걸려 시설에서 지냈다⁶¹. 우에노 치즈코(上野千鶴子, 1948~)에 따르면, 치매에 걸린 모리사키에 대해 아들 마츠이시 이즈미(松石泉, 1956~)가 보낸 편지에 "어머니는 지금 '모리사키 가즈에'에서 내려와서 평온하게 지내고 있습니다"라는 내용이 있었다고 한다.

90세를 맞이하던 2017년 1월, 뇌경색이 일어나 후쿠오카현 내 병원에 입원, 그리고 2022년 6월 15일 급성 호흡부전으로 95세의 나이로 사망했다⁶². 아들 마츠이시는 모리사키가 엔딩노트에 남긴 유언대로 '구회일처(俱會一處)'라고 새긴 묘에 묻었다고 한다⁶³.

이 묘에 대해 모리사키 자신은 다음과 같이 적고 있다.

저는 이 땅[=무나카타시(宗像市)]으로 이사 왔을 때 신흥 묘지에 작은 무덤을 구했습니다. 지금은 둘로 만든 무덤을 좋아하지 않지만, 그러나 자식도 손자도 혈연인 저보다 더 넓고 깊게 일본의 풍토를 어린 영혼으로 흡수하며 자라고 있습니다. 그 인연에 대한 마음 그대로

⁵⁷ 「맹세 : 1 내일의 당신에게 모리사키 가즈에(잠깐 심호흡)」, 『아사히신문(西部)』 2004.12.5 조간.

⁵⁸ 앞의 책 『낯선 나』 197~198 쪽.

⁵⁹ 「시작 : 빛나는 생명의 과문 모리사키 가즈에(잠깐 심호흡)」, 『아사히신문(西部)』 2004.1.11 조간.

⁶⁰ 다카하시 쓰토무(高橋勤) 「바다를 보는 사람」(『모리사키 가즈에 컬렉션 - 정신사(精神史)의 여행 月報 1』 3 쪽, 藤原書店, 2008.11).

⁶¹ 우에노 치즈코(上野千鶴子) 「우리는 당신을 잊지 않겠습니다」(앞의 책, 『현대사상 11월 임시증간호』 330 쪽).

⁶² 『아사히신문(西部)』 2022.6.19 조간.

⁶³ 『아사히신문』 2022.9.10 석간.

묘비에 '구회일처(俱會一處)'라고 새겨 넣었습니다. 언젠가 일본 어딘가에 '모두의 숲'으로서 산골(散骨)이 자라는 시대가 되었을 때, 저도 그 숲에 보태 주세요.⁶⁴

그런데 모리사키가 '돌로 만든 무덤'을 좋아하지 않는 것에 대해서는 다음과 같이 서술되어 있다.

패전 후 귀국한 나는 꽤나 긴 세월 동안 일본의 묘지, 묘석의 모습에 대해 고민했어요. / 저건 아름다운 모습이 아닙니다. [...] 나는 왜 일본인은 무덤을 저렇게 촌스럽고 현세에 집착하는 모양으로 만들어야만 하는 것일까 하는 생각이 들었어요. 어쨌든 경주의 왕릉에 매료된 나였으니까요. 나는 산기슭에 조그맣게 흙을 쌓고 풀로 덮어놓은 초라한 조선인의 서민 무덤도 이곳이 고운 인간적인 면모를 가지고 있었구나 하는 생각이 다시금 들었어요.⁶⁵

모리사키는 '○○가문의 무덤이라고 새기는 생자주의(生者主義)와 그 형태'를 싫어하면서도 신흥묘지의 '일반인 무덤'을 묘지로 삼았다. 그것은 "나는 항상 평범한 삶에 받을 던고 있고 싶기 때문"이다. 하지만 고민하다 '인연이 있는 사람과 인연이 없는 사람이 함께 한 곳에 모여 만나는 것'을 의미하는 '구회일처(俱會一處)'라는 글자를 새겨 넣었다고 한다⁶⁶.

모리사키에게 있어서 살아간다는 것은 '서로 대화할 수 있는 공간을 만드는 것'⁶⁷ 이기 때문이며, 그 대화에는 문화가 다른 사람도, 또한 생사를 달리하는 사람도 포함되기 때문이다. 왜냐하면 죽음은 새로운 나를 만나기 위한 생명의 온기이기 때문이다.

마지막으로 78 세 때의 시 한 편을 들어본다.

좋은 아침 / 좋은 아침 / 오늘 아침의 나는 불러본다 / 무거운 두 팔 두 다리의 / 아픔을 동반한 깨어남입니다 / 일흔 여덟 살 4개월 / 한여름의 서늘한 아침 햇살 / 잠든 채로 고요히 두 팔을 / 곧게 하늘로 뻗습니다 / 오늘의 생명을 이 팔로 / 저림과 아픔의 두 다리로 / 받고 받치며 걷습니다 / 부처님은 늘 곁에 계시지만 / 모습을 드러내지 않는 것이 귀한 것이다 / 사람의 소리 없는 새벽에 / 은은하게 꿈속에 나타나신다 / 역사를 엮어가는 사람의 세상 / 오늘 아침의 생명으로 흐릅니다 / 저린 두 팔의 / 각성운동을 반복하며 / 일어나기 위한 힘의 준비입니다 / 생명의 불꽃이 반짝반짝 / 오늘 아침의 나여! / 좋은 아침이네요 / 착실히 생명을 받아들이세요 / 좋네요 일어나요 / 카즈짱 상쾌하게 일어서세요 / 당신에게 지금의 육체를 맡깁니다 / 정원에 한 소리 곤충의 소리 / 이어 한 소리 매미의 소리 / 새벽으로 / 살아있는 것들의 / 생명의 / 시간이 열립니다.⁶⁸

모리사키 노년기의 삶과 사상은 '생명의 시간'(=Kairos)를 계속 열며, 날마다 '낮선 나'를 만나는 여정이었다는 것을 본고의 결론으로 삼고자 한다.

⁶⁴ 앞의 책, 『생명의 모국 찾기』 236~237 쪽.

⁶⁵ 앞의 책, 『어른의 동화·죽음의 이야기』 126~127 쪽.

⁶⁶ 앞의 책, 『어른의 동화·죽음의 이야기』 126, 128 쪽.

⁶⁷ 앞의 책, 『모리사키 가즈에 시집』 142 쪽.

⁶⁸ 앞의 책, 『이야깃거리 바다』 77~79 쪽.